FRN 79-2 -12— 3

資料名 梅津只圓翁傳

刊・写　　軸・帖

1 冊

所蔵者 九州大学附属図書館

函 名 630 ーラ4

撮 影 富士ゼロックス(株)

昭和54年3月7日

福 岡 市 民 図 書 館

梅津只圓翁傳

680
ウ
4

梅津只圓翁傳

佐藤文次朗

680
ウ
4

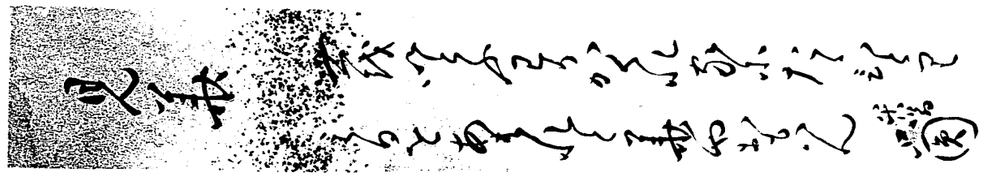
不與聖人同憂

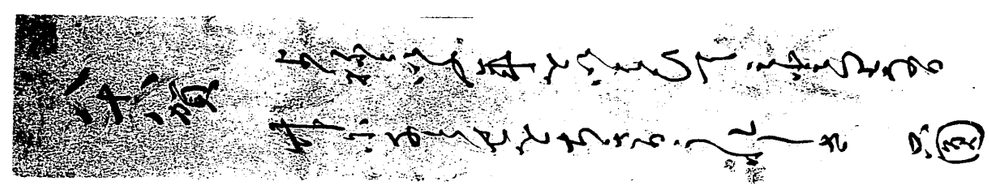
盛德大業至矣哉

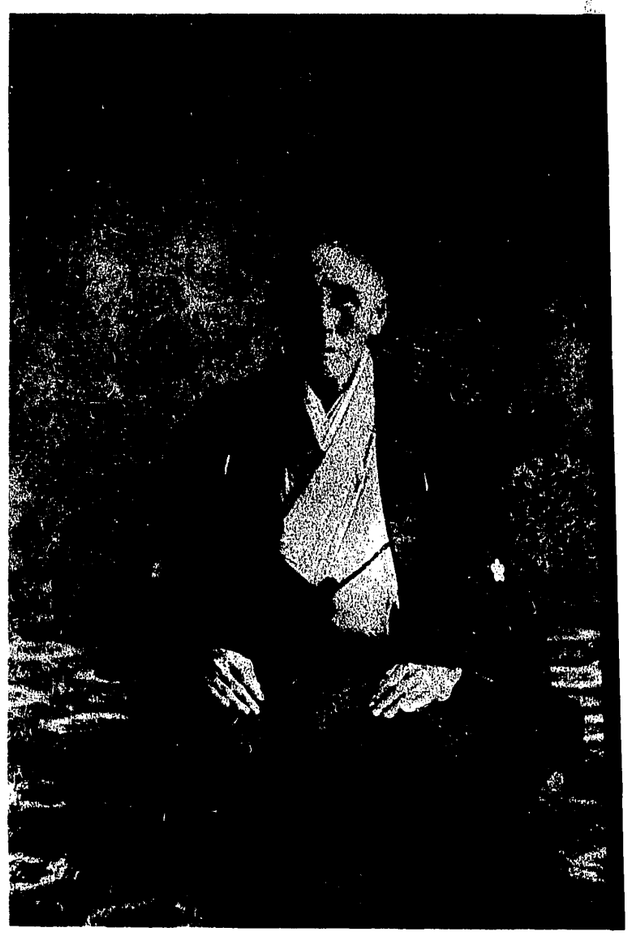
次山曰

訂正

場所	誤	正
只圓翁寫眞裡面	格勤衆、過	格勤過衆、
一二頁一行五字目	若の一家	若の一字
二一頁一一行一一字目	月日は送	月日を送
二三頁三行八字目	師恩稻當	師恩相當
〃　〃二九字目	苦惱しした	苦惱した
二五頁九行二二字目	『翁六十五	（翁六十五
〃　一一行六字目	最慘憺たる	最慘澹たる
二七頁一一行一九字目	慘憺たる	慘澹たる
〃　一五行一五字目	〃	〃
三一頁七行三一字目	林直康氏が	林直康氏等が
四八頁三行一一字目	披能露が	披露能が
五四頁二行一五字目	漢字を	漢學を
五五頁二行三四字目	份裝で	扮裝で
〃　九行十字目	梅津朔藏	梅津朔造
六三頁一〇行三六字目	スイント	ストント
六八頁六行三七字目	推量さたた	推量された
一〇四頁五行二四字目	本綿車を	木綿車を
〃　一〇行三七字目	問拍子を	問拍子も
一一九頁七行二四字目	事傳があり	言傳があり
一三三頁一二行二八字目	（昭和九年	（昭和九年十月







梅津只圓翁

（明治三十七年十月
八十八歳祝賀記念）

米壽賀筵記念寫眞

梅津朔造氏　翁夫人　翁　（明治三十七年十月八日撮影）

米壽賀筵記念寫眞

明治三十七年十月八日中庄只圓翁宅にて梅津健介氏撮影

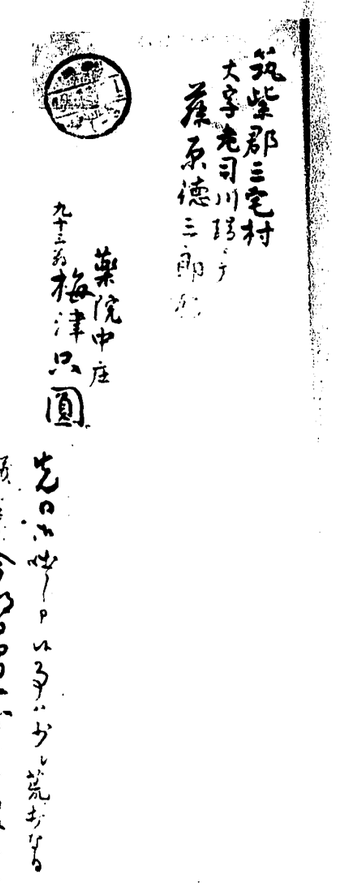
（中央左翁、右夫人）

翁るむ認を冊短てに前机齊書

（影撮氏介健津梅）　頃歳十九

翁の宿宅玄關（立てるは雅米。その左手が玄關口。背後が居宅）

只圓翁の墓所
（博多願正寺に在り。傍に立てるは筆者）



翁自筆端書
（藤原德三郎氏藏）

翁の銅像（左上は製作者津上昌平氏）

只圓翁銅像建設發起人及姻戚

前列向つて右より、牟田口利彦氏、令夫人、佐々木氏御老母、佐々木任八氏、梅津正利氏。

後列向つて右より、佐藤文次郎氏、柴藤精藏氏、宇佐元緒氏、古賀得四郎氏、藤原德三郎氏、筆者。

梅津只圓翁傳

杉山萠圓著

梅津只圓翁像

翁舊黑田藩喜多流能樂師也、明治四十三年以九十四歳沒矣、若冠而至藝、切磋成一家、喜多流宗家六平太氏未壯、被囑輔導之、屢咫尺雲上高貴、持身謹嚴恬淡、精進藝道不顧米鹽、其接人也溫乎如玉、而薫陶子弟也極嚴正、至老不懈、主宰福岡地方神社催能格勤衆、過一藩人士聞翁名莫不正襟、沒後二十五年舊門下追慕不措、講大方喜捨而建之。

梅津只圓翁の生涯

故梅津只圓翁の名前を記憶してゐる人が現在、全國に何人居るであらうか。翁の名は其の姻戚故舊の死亡と共に遠からず此の地上から平々凡々と消え失せて行きはしまいか。

只圓翁から能樂の指導を受けた福岡地方の人々の中で、私の記憶に殘つてゐる現存者は僅々左の十數氏に過ぎない。（順序不同）

牟田口利彦（舊姓梅津）野中到、隈本有尙、中江三次、宇佐元緒、松本健次郎・加野宗三郎、佐藤文次郎
堺仙吉、一田彦次、藤原宏樹、古賀得四郎、柴藤精藏、小田部正二郎、筆者（以上仕手方）
安川敬一郎、古賀幸吉、今石作次郎、金內吉平（以上囃方）
小嶋武雄、宮野儀助（以上狂言方）

其他故人となつた人々では（順序不同）

間邊――、梅津正保・山本每、梅津朔藏、同昌吉、桐山孫次郎、川端久五郎、上原貢、戸川槌太郎、小山篤、中江正義、粟生弘、澤木重武、齋田惟成、中尾勝吉、石橋勇三郎、上村又次郎、齊村鑑栖、大賀小次

郎、吉本萱三、白木半次郎、大野仁平、同德太郎、河村武友、林直規、尾崎臻、鬼木榮二郎、上野太四郎、船津權平、岩佐專太郎、杉山濯園、（以上、仕手脇方其他囃方狂言方等略）

まだ此他に遺漏忘失が多數ある事と思ふ。氏名なども間違つてゐる人があるかも知れないが筆者の記憶の粗漏として諒恕御訂正を仰ぎ度い。

その生存してゐる僅かな人々と相會して翁の舊事を語ると誠に感慨無量なものがある。

翁の一生涯は極めて、つゝしまやかな單純なものであつた。

維新後、西洋崇拜の弊風が天下を吹きめぐつて我國固有の美風良俗が地を拂つて行く中に毅然として能樂の師家たる職分を守り、生涯を貫いて倦ます。悔いず。死期の數刻前までも本分の指導啓發を念としつゝ息を引取つた……と云ふだけの生涯であつた。翁は其の九十幾年の長生涯を一貫して、全然、實社會と無關係な仕事に捧げ終つた。名聞を求めず。榮達を願はず。米鹽をかへりみずして、たゞ自分自身の藝道の切磋琢磨と、子弟の鞭撻に精進した……と云ふ。たゞそれだけの人物であつた。

もしも、それが聊かでも實社會に關係のある仕事であつたならば……又は同じ藝術でも繪畫とか、文章とか、劇とか、音曲とか多小世俗に受け入れられ易い仕事に關係して居られたならば……さうしてあれだけの精彩努力を傾注されたならば翁は優に一代の偉人、豪傑もしくは末世の聖賢として名を青史に垂れて居たであらう。

況んや翁程の藝力と風格を持つた人で、聊かでも名聞を好み、俗衆の心を執る考へがあつたならば、恐らく世界の文化史上に名を殘す位の事は易々たるものがあつたであらう。

これは決して筆者一存の誇張した文辭では無い。その當時の翁の崇拜者は、不言不語の中に皆しかく信じてゐたものである。さう云ふ筆者も翁の事を追懷する毎に、さうした感を深めて行くものである。

翁の偉大なる人格と、その卓絶したる藝風は、維新後より現在に亘る西洋崇拜の風潮、もしくは滔々たる尖端藝術の渦の底に蔽はれて、今や世人から忘れられかけてゐる。翁も亦、不言不語の間に此事を覺悟し滿足してゐたらしい事が、その生涯を通じた志業の裡に認められる。さうして今は何等の傳ふる處もなく博多下祇園町順正寺の墓地に灰頭土面して居る。墓を祭る者もあるか無しの狀態である。その由緒深い昔の私宅や舞臺も、見窄らしい借家に改造されて軒傾き、瓦辷り、壁が破れて、覗いて見ただけでも胸が一ぱいになる有樣である。

しかし翁の眞面目は其處に在る。翁の偉大さ崇高さは、さうした灰頭土面の消息裡に在る。生涯の光輝と精彩とを塵芥、衆穢の中に埋去して惜まなかつた處に在る。

畫に於ける仙崖、東圃。學に於ける南冥、益軒、業に於ける加藤司書、平野次郎、野村望東尼は尙赫々たる光輝を今日に殘してゐる。しかも我が梅津只圓翁の至純至誠の謙德は、それ等の人々よりも勝れて居にのであらう。何等世に輝き殘る處無く默々として忘れられて行きつゝ在る。

繰返して云ふ。

現在の日本は維新後の西洋崇拜熱から眼ざめつゝ在る。國粹萬能を叫ぶ聲が津々浦々に滿ち〳〵て今まで棄てゝかへり見られなかつた鄕土の產物、藝術が、國粹の至寶として再認識され、珍重され初めつゝ在る。能樂の如きも老人の閑技、骨董藝術として、忘却されてゐたものが、明治の末年頃から西洋人の注意を惹いて以來、日本の識者間に再認識され、騷がれ始めた。さうして現在の民族藝術尊重熱の怒波に乘つて唯一無上の國粹藝術として一般の知識階級、學生層に洪水の及く普及しつゝ在る。

梅津只圓翁は此時代を見ずして世を去つた。しかも維新後、能樂沒落のたゞ中に默々として斯道の研鑽を怠らなかつた。東都の能樂師等が時勢の非なるを覺つて、裝束を賣り、能面を賣つて手內職や薄給取りに轉向してゐる際にも翁は頑として能樂の守護神の如く子弟を鞭撻し續けてゐた。

明治の後年になつて東都の能樂師がボツ〳〵喰へる樣になつて互に門戶を張り合つて來た時、翁の如き一代の巨匠が中央に乘出してゐたならば、當時の能界の巨星と相並んで聲威を天下に張る事が容易であつたかも知れぬ。しかも翁は其樣な榮達、名聞を求めず。一意、舊藩主の恩顧と、永年奉仕した來た福岡市內各社の祭事能に關する責務を忘れず、一身を奉じつくして世を終つた。

風雲に際會して一時の功名を遂げるのは比較的容易であると聞く。權を負ひ、才力を恃んで天下に呼號するのは英雄豪傑の會心事でなければならぬ。

しかし純忠の志を地下に竭し、純誠の情涙を塵芥裡に埋めて、輕棄されたる國粹の藝道に精進し無用の努力として世人に忘却されつゝ、滿足して世を去るといふ事は普通の日本人…世間並の國粹流者の能くする處でない。

舊藩以來福岡市內藥院に居住し醫業を以て聞こえてゐる前醫師會理事故權藤壽三郎氏（現病院長健兒氏令兄）は梅津只圓翁の係醫として翁の臨終まで診察した人であるが嘗て筆者にかく語つた。

『私は謠曲とか能樂とか云ふものは些しも解からず、又面白いとも思はない。しかし醫師として梅津只圓翁の高齡と元氣とには全く敬服してゐた。私は翁を健康な高齡者の標本として研究してゐたので、爾後幾多の老人の診察に際して非常な參考となつた事を感謝してゐる。晚年と云つても翁が九十二歲、明治四十一年から三年間病臥して居られたが、それと云つても決して病氣では無い。たゞ樹木の枯れるやうに手足が不叶ひになられただけで、健康には申分無く、そのまゝ枯れ果てゝ三年後の夏の何日であつたかに、眠るが如く世を去られたまでの事であつた。

その亡くなられた當日の朝の事であつた。

門下生の中でも一番の故老らしい品のいゝ二人の老人が、無論お名前なぞ忘れてしまつたが、わざ〳〵私に面會に來られて翁の容態を色々尋ねられた後、實は老先生が亡くなられる前に聞いて置き度い謠曲の祕事が唯一つ在る。それをお尋ねせずに老先生に亡くられては甚だ殘念であるが、その事を老先生にお尋ねする事を主治醫の貴下にお許しを受けに伺つた次第ですが、……と云ふナカ〳〵叮重なお話であつた。

これには私も當惑した。むろん梅津先生は御重態どころでは無い。その前日の急變以來眠も、耳も、意識も全く混濁して居るとしか思へないので、單に呼吸して居られる。脈が微に手に觸れるといふだけの御容態である。御家族の方や私が御氣分をお尋ねしても御返事をなさらない事が數日に及んでゐる折柄で、面會などは主治醫として當然、お斷り申上げなければならない場合であつたがしかし又一方から考へてみると、その時は、その面會謝絶すらも無用と思はるゝ絶望狀態で、何を申上げてもお耳に入る筈は無い。御臨終の妨げになる心配は無いと考えたから折角の御希望をお止めするのは却つて心無い業ではあるまいかと氣が付いて……それならば折角のお話ですから私が立會ひの上でお尋ね下さい……と御返辭した。

二人の老人は年配に喜ばれた。即刻、私と同伴して程近い中庄の老先生の枕頭に來られて、出來るだけ大きな聲で、私にはチンプンカンプンわからない謠曲の祕傳らしい事を繰返し〳〵質問されたが私の推察通り意識不明の御容態の事とて、老先生が御返事をなさる筈が無い。短い息の下にスウ〳〵と眠つて居られるばかりである。

二人の老人は暗然として顏を見合はせた。仕方なしに今度は御臨終に近い老先生の枕元で本を開いて、二人の御老人が同吟に謠ひ出した。

それが何の曲であつたかもとより私の記憶に殘つて居やう筈も無いが、たしか開かれた一枚の眞中あたりまで謠つて來られたと思ふうちに老先生の呼吸が少し靜かになつて來た。さうして間もなく私が執つて居た觸れるか觸れないか程度の脈搏が見る〳〵ハッキリとなり、突然に喘鳴が聞こえ初めたと思ふと、老先生は如何にも立腹されたらしく、仰臥して眼を閉ぢたまゝ眉根を寄せて不快さうに垢だらけの頭を左右に動かされた。

二人の老人は眞青になつて汗を拭き〳〵顏を見交はした。さうして二人で二三度同じ處を謠直されたと思つたが、間もなく左右に振り續けて居られた老先生の頭が安定し、喘鳴がピッタリと止んで『その通り〳〵』と云ふ風に老先生の頭が枕の上で二三度縱に緩やかに動いたと思ふと、又舊の通りの短い呼吸の裡にスヤ〳〵と眠つて行かれた。家内の御方が慌てゝ何か云ふて居られたがモウ何の御返事も無かつた。

二人の老人はそのお枕元の疊に兩手を突いて暫く涙に暮れて居たが私が『モウ宜しいですか』と念を押すと『お蔭で』と非常に感謝されたので其儘御内の方に御注意を申上げて退出した。

老先生は其儘その夜の中に御他界になつたが、その時の醫師としての私の驚きは非常なものがあつた。

あの様な深い昏睡に陷つて居られる、申さば斷末魔の老先生が御門弟の謠ひの間違ひを聞きわけられる。之を是正されるといふ事は如何に藝術の力とは云へ醫學上あり得べき事で無い。一つの途方も無い奇蹟、もしくは驚異的な出來事である。してみると人間の精神の力は肉體が死んでも生き殘るものかも知れない……とつく〴〵思はせられた事であつた。

此話を筆者と一緒に聞いて居られた權藤夫人は現存して居られる。又前醫師會理事權藤壽三郎氏が言葉を飾る人でなかつた事は周知の事實である。

筆者は、まだ、これ程の偉大崇高な臨終を見た事も聞いた事も無い。翁は九州の土が生んだ最も高德な人では無かつたらうか。

その銅像の銘には古賀得四郎氏揮毫の隷書で左の意味の文句が刻んで在る。

梅津只圓翁

翁ハ黑田藩喜多流ノ能樂師ナリ。明治四十三年九十四歳ヲ以テ歿ス。若冠ニシテ至藝、切磋一家ヲ成ス。喜多流宗家六平太氏未ダ壯ナラズ。囑セラレテ之ヲ輔導ス。屢雲上高貴ニ咫尺シ、身ヲ持スルコト謹嚴恬淡ニシテ、藝道ニ精進シテ米鹽ヲカヘリミズ、ソノ人ニ接スルヤ溫乎玉ノ如ク子弟ヲ薫陶スルヤ極メテ嚴正ニ、老ニ到ツテ懈ラズ。福岡地方神社ノ祭能ヲ主宰シ格勤衆ニ過グ一落人士翁ノ名ヲ聞テ襟ヲ正サザルナシ。歿後二十五年、舊門下追慕措カズ。大方ノ喜捨ヲ請フテ之ヲ建ツ。

隱れたる偉人、梅津只圓翁の略歴は下記の通りである。勿論僅かに殘つてゐる翁の手記等によつて、微力な筆者が調査、推測想像したものだから遺漏敗缺が少く無い事と思ふが其樣な點は引續き大方の御指摘是正を蒙つて、老師の眞傳記を完成する事が出來たならば、筆者の幸福之に過ぐるものは無い。たゞ粗漏蕪雜のまゝ大體を取纒めて公表を急がなければならなくなつた筆者の苦衷を御諒恕の程幾重にも伏願する次第である。

◇

梅津家は代々非常な遠祖から歌舞音曲の家柄であつたといふ。山城國葛野郡に現在梅津といふ地名が在つて、梅津家は代々此處に定住し、さうした家業を司つて居たらしい。但し如何なる種類の歌舞音曲であつたかは的確に判明しないが、後に同家の家系の中から梅若九郎右衞門なぞいふ名家を分派した處を見ると、相當の繁榮を遂げてゐた事が推測される。梅若といふのは梅津の一字を殘

し、若の一家を附け加えて藝名とし、舊來の梅津家の傳統と區別して華やかに披露をした處から起つた家名らしく、今の梅若家の祖先であるといふ。なほ詳細は不明であるけれども平安朝時代にその梅津家の一人が九州筑後高良山玉垂神社所屬の田樂法師として下向し、久留米市の南方一里ばかりの所に現存する朝日村を所領として家業を傳へた。(坂元雪鳥、山崎樂堂兩氏談) 今でもその朝日村に梅津家の墓石が現存して居るといふ。

もちろん其の當初には、まだ能樂なるものが發生してゐなかつたのだから、いづれ田樂、もしくは里神樂類似の神事舞曲の司となつてゐたもので、後に能樂が流行して來るにつれて、自から轉向して家業とし、祭事能を司つて來たものであらうと考えられる。その喜多流を酌んだ由來も、もとより詳で無いが、元龜天正の亂世に、肥前に似我といふ忠勇無双の士が居た。太皷に堪能で喜多流の大家であつたといふやうな話を筆者が幼少の時代に組父から聞き傳えて居るところから考えると喜多流なる流派の存在は現在傳ふる處よりもズツト古く戰國時代から既に存在してゐて、九州地方にも流行してゐた。從つて梅津家も、その流を酌んでゐたものでは無いかとも考えられるやうであるが、しかし、これは單なる臆測類似の聞き傳へで、或は筆者の聞誤りか記憶違ひかも知れない。況んや宗家の記錄と甚しい時代の相違があり、引例考證らしいものすら絶無であるから、たゞ何かの參考として此處に記載して置くに止める。

それから物變り星移つて德川時代に入り、筑前福岡が黑田の城下となつた時、その梅津の本家の方は博多に在住して其頃の所謂町役者となり、山笠に名高い博多の氏神、櫛田神社の神事能を受持つてゐた。現梅津正利師範は故梅津正保師範と共に此の家系の末に當つてゐるのであるが、同時にその分家である今一軒の梅津氏は觀世流の藤林家と相並んで藩公黑田家のお抱えとなり、邸宅と舞臺を藥院中庄に賜はり士分に列せられてゐた。

その後裔に當る黑田藩士梅津源藏正武氏（正利氏令息で隱居して一朗と云つた）と、その妻判女（兒玉氏）との間に一女二男が生まれた。

兄は文化十四年丁丑四月十七日出生、梅津源藏利春といふ。初め政之進、又は榮と名のつてゐたが、藩主長薄公の御沙汰によつて改名したものである。それが後に隱居して只圓と號した。すなはち我只圓翁であつた。

利春（只圓翁）の妻は黑田家播磨殿家士、梅津羽左衛門の娘で弘化三年に緣組したが、元治元年十一月に三十五歳で死別したので明治三年七月、後妻として野中勝良氏の姉イト子と緣組した。尙參考の爲翁の姻戚關係を左に掲げて置く。(翁生前の手記に據る)

◆姉セキ　弘化四年未六月一日生る。明治五年佐々木啓次郎に嫁す。

◆嫡子　梅津榮重利、嘉永三年戊二月十六日生る。明治四年未十月家督。明治十二年一月十八日卒す。無涯

と読す。

◆二女マサ　嘉永五年子十一月六日生る。明治二年卒田口重蔵に嫁す。同廿五年八月十日卒す。

（以上先夫人の所生）

◆三女千代　明治四年未九月晦日生る。明治廿四年野中到に嫁す。

◆養子　梅津利彦　卒田口重蔵三男、明治十五年十月廿五日生る。明治廿四年六月に養子す。明治三十年四月改名。明治三十七年十二月事故有て離別す。

◆養子　梅津健介。佐々木啓次郎次男。明治十一年六月十六日生る。同三十八年養子す。同年十月家督譲る。

◆弟　梅津九郎助。荒巻軍平養子となり伊右衛門と云ふ後軍治と改め其後行度と改む。明治九年三月廿日卒す。行榮と云ふ。行年五十四歳。

元來梅津家は前記の通り、黒田藩お抱えの能樂師の家柄として喜多流を相傳してゐたので、利春は幼少の頃から部屋住のまゝ藩主齊清公の前に出て御囃子や仕舞を度々相勸めて御感に入り、いつも御褒美を頂戴してゐた。

續いて天保三年の春師家へ入門の手續をして直ぐに祕曲『翁』の相傳を受けた、時に利春十六歳と傳へられて居るが、これは其の時代の事であるから直接上京して入門した譯では無い樣である。大藩黒田侯の御取濟によつて、地方の神社祭事に是非とも奉納しなければならぬ神曲『翁』の允可を受けたものであらう。たゞ若冠十六歳で能樂師家擔當の重大責務とも云ふ可き神曲『翁』の相傳を受けたといふ一事によつて、その當時の黒田藩内の能樂界に於ける利春の聲望と實力の如何に隆々たるものがあつたかゞ想像される次第である。

それから利春は十二年後の弘化元年の春（二十八歳）と嘉永元年春（三十二歳）と兩度上京した。喜多十三世能靜氏に就いて能樂を修業し、重習能少習等を相傳したと云ふ。

次の話は翁の其頃の苦心をあらはすもので或は逸話の部類に入れる可き事柄かも知れぬ。又出所等も詳かでないが、筆者が何かの大衆雜誌で讀んだ事である。

翁が能靜氏の門下で修業中名曲『融』の中入後老人の汐汲の一段で『東からげの潮衣――オ』と云ふ引節の中で汐を汲み上げる呼吸がどうしても出來なかつた。そこで能靜氏から小言を云はれつ放しのまゝ殘念に思つて歸郷の途中、須磨の海岸で一休みしながら同地の名物の汐汲みを眺めて居たが、打ち寄せる波が長く尾を引いて、又引き返して逆卷かうとする其の一刹那をガブリと搔ひ桶に汲み込んで、そのまゝ波に追はれながら後退りして來る海士の呼吸を見てやつと能靜氏の致ふる『汐汲み』の呼吸がわかつた。同時に『潮衣――オ――』といふ引節に含まれた波打際の妙趣がわかつたので、感激しながら歸途に就いたと云ふ。

前記の通り事の眞僞は知らないが、斯樣な話が世に傳えられて居る處を見ると、この當時の翁の

苦心が多少に拘らず世に傳えられてゐた證左として玆に附記して置く。

これより前、弘化三年三月、父正武氏の退隱により利春氏が家督を相續した。時に利春三十歳。翌弘化四年三十一歳の時に父を喪つた。

父を喪つた後の利春は藩内の能樂に關する重責を一身に負ひ、その晩年に親はれた非凡の氣魄、必死の丹靑と同樣……もしくはそれ以上の精彩を凝らして斯道の研鑽に努力した事が察しられる。その手記には『その後、御能、囃子等度々相勤むる』と極めて謙遜した簡短な文辭が挾んで在るだけであるが……。

嘉永五年の三月に利春は、中庄の私宅舞臺（福岡市藥院）に於て相傳の神曲『翁』の披露能を催した。相傳後正に二十年目に初めて披露をした譯である。翁一流の愼重な謙遜振りが此時にも現はれてゐる。

これは晩年の翁の氣象から推察して、相傳後、自が滿足するまで練りに練り、稽古に稽古を重ねた結果と思はれるが、更に今一歩深く翁の性格から推し考えてみると翁は決して自分一人を鞭撻してゐたのではあるまいと思はれる。

能樂は元來綜合的な舞臺藝術である。だから仕手方を本位とする地謠、囃方、狂言等に到るまで**神曲の莊嚴と聲調樂とを遺憾なく發揮し得なければ如何に達者な仕手方**（翁自身）**と雖も十分の舞臺効果を擧げる事が出來ない**筈である。

しかも地方僻遠の地で『翁』ほどの祕曲を理解し、これを演出し得る程に眞劍な囃方、狂言方等は容易に得られない關係から、當地方の能樂界の技倆が、其の程度にまで向上する時機を待つてゐたものか、もしくは其の程度に達するまで、翁が挺身して一同を鞭撻し續けて來たものではあるまいかと云ふ事實が、前述の理由から想像される。

さうして萬一さうとすれば、只圓翁の此の披露は、當節の披露の如き手輕い意味のもので無い。正に福岡地方の能樂界に一紀元を劃した重大事件であつたらうと思はれる。同時に翁の其處までの苦心と之に對する一般人志の翹望は非常なものがあつたに違ひ無い事が想像されるので、其の能が兩日に亘り、黑田藩のお次（第二種）裝束の拜借を差許される程の大がゝりのものであつた事實を見ても、さもこそと首肯される次第である。

何れにしても此の翁披露能は一躍只圓翁をして福岡地方の能樂界の重鎭たらしめる程の大成功を收めたらしい。能後、翁は藩公より藩の御裝束預かりを仰付られた。これは藩の能樂家柄として最高無上の名譽であると同時に、藩内の各流各種の催能はすべて翁の支配下に屬しなければならぬと云ふ大責任が、それから後翁の双肩に落下した譯である。

かくして此の神曲『翁』披露能後に認められた翁の人格と藝能の卓拔さがその後引續いて如何に名譽ある活躍を示したか……さうして其間に於ける翁の精進が如何に不退轉なものが在つたかは、後掲の記錄を一見しただけでも一目瞭然であらう。

不幸にして其頃は封建時代で、その時代特有の窮屈な規範に縛られ易い能樂の事とて、翁の聲價も極めて小範圍に限つて認められてゐた憾みがある。前にも述べた通り萬一これが、ほかの大衆的な藝術で、封建の障壁が取拂はれてゐる現代であつたならば、藝術界に於ける翁の威望はどの範圍にまで及んでゐたであらうか。

嘉永七年（安政元年利春三十八歳）三月。福岡市天神町水鏡天滿宮二百五十年御神祭につき、表舞臺（今の城內練兵場、舊射的場附近御下屋敷所在）で三日とも翁附の大能を拜命した。殊に藩公の御所望で、有習能（普通の能ではない達人でなければ舞へない祕傳の曲目）を仰付られた。右つとめ終つて後御目錄を頂戴し荒卷軍治氏（翁の令弟）に祝言を仰付られた。

又文久元年九月（利春四十五歳）宰相公（長知）御昇進御祝につき、表舞臺で同二十八日より三日共翁附の御能を仰付られた。

同じく文久元年十月十五日に藩公から翁に御用召があつたので、何事かと思つて御館へ罷出たところ御用番家老黑田大和殿から御褒美があつた。すなはち『利春事、家業の心掛よろしく、則して藝道丈夫である。のみならず平日の心得方よろしく暮し向萬事質素で、門弟の引立方等が深切に行屆いてゐる段が藩公の御耳に達し、奇特に思召され、御目錄の通り下し賜はり、彌々出精せよといふ有難きお言葉である』といふ御沙汰であつた。且『格別の御詮議を以て御納戸組馬廻格に加入仰付られ候事』といふので無上の面目を施して退出した。

右の御褒美の中に『平日の心掛宜敷』『暮向萬事質素』『門弟引立方深切』云々といふ事實は筆者等が翁の晩年に於ても親しく實見した處で、後に掲ぐる翁の逸話を一讀されたならば思ひ半に過ぐるであらう。

もし夫れ翁の『藝道の丈夫』云々の一事に至つては、吾々門下の云爲すべき事柄で無いかも知れないが、しかし、さうした藝風は翁の晩年に於ても吾々が日常に感銘させられ過ぎる位感銘させられてゐた事實であつた。

翁が頹齡に及んで起居自由ならず所謂ヨボ〳〵狀態に陷つて居られても、一度舞臺に立たれると豪壯鬼神の如く、輕快鳥の如しとでも形容しやうか。その丈夫な事血氣の壯者を凌ぐどころで無い。さながらに地面から生えた大木か、曠野に躍り出た獅子のやうに、人々を驚嘆渴仰せしめて居た事を想起する。

以上を要するに翁の生涯は『恭儉己を持し、博愛衆に及ばし』の御勅語を國粹中の國粹たる能樂

道に於て丈夫に一貫したものである事實が、此記錄によつても明らかに立證されてゐるであらう。

文久三年（利泰四十七歳）一月元旦御謠初御囃子の節、藩主長知公御手づから御袴を拜領仰付けられた。これは能樂師として格外の名譽で、武功者が主君の御乘馬を拜領したのと同格である。

明治元年（翁五十二歳）藩主長知公京都へ御上洛の節同地紫野大德寺內、龍光院に御宿陣が定められた。その節御供した御納戸組九人の中、翁は長知公の御招待客席で、御囃子仕舞等度々仰付けられた。そのほか所々に召連れられて御囃子仕舞等を仰付られたとあるが、察する處長知公も翁の至藝が餘程の御自慢であつたらしい。

明治元年と云へば鳥羽伏見の戰を初め、江戸城の明渡、會津征伐等猫の眼の如く變轉する世相、物情騷然たる時節であつたが、その中に、かほどの名譽ある優遊を藩公と共にしてゐた翁の感懷はどんなものであつたらうか。

晩年の翁が榮達名聞を棄て、一意舊藩主の知遇に奉酬する態度を示した心境は或は此間に培はれたものではあるまいか。

明治二年四月四日長知公は新都東京へ上られた。翁も例によつて御供をして荒戸の埠頭から新造の黑田藩軍監環瀛丸に乘り、十三日東京着。隔日の御番（當番）出仕で、夜半二時迄の不寢番をつとめた。毎月お扶知方として金十五圓二歩を賜はつた。

此時翁の師匠、喜多能靜氏（喜多流十二世家元。現家元六平太氏は十四世）は根岸に住んでゐたが、その寓居を訪ふた翁は『到つて靜かで師を尋ねて來る人もなかつた』と手記してる。

しかしこれは矢張り翁獨特のつゝしまやかな形容に過ぎなかつたらしく察しられる。

その能靜氏の根岸の寓居は現在もソツクリ其のまゝの姿で石川子爵が住んで居られる。まことに堂々たる構へであるが、しかも此の明治二年前後は、能樂師が極度の窮迫に沈淪してゐた時代であつた。現家元六平太氏が家元として引繼がれた品物は僅かに張扇一對といふのが事實であつたから能靜氏も表面は立派な邸宅に住みながら內實は餘程微祿した詫しい生活に陷つて居られたものであらう。

さうして、他の能樂師の樣に別の商賣に轉向する藝もなく、權門に媚びる才もなく、實れない能樂を守つて空しく月日は送つて居られたものであらう。

『到つて靜かで、師を訪ふて來る人も無い』

といふ只圓翁の簡素な手記の中にはその時に翁の胸を打つた或るものが籠められて居たことがわかる。歌道を嗜み禮儀に篤い翁が、一切をつくした名文では無かつたらうかと思はれる。

かうした純藝術家肌の能靜氏の處へ今を時めく宰相公のお納戸組馬廻りの格式を持つた翁が恭し

く訪問した情景は正に劇的……小說的なものであつたらう。能靜氏の喜び、翁の感激は、どんなであつたらうか。

能靜氏の藝風は、極めてガツチリした、不器用な、さうして大きな感じのするものであつたと云ふ。現家元六平太氏が常に先代々々と云つて例に引くのは此人の事である。

翁は非番の日には必ず能靜氏を訪うて稽古を受けた。遠からず滅亡の運命に瀕しつゝある能樂喜多流の命脈を僅かに殘る一人の老師から受け繼ぐべく精進した。

又藩公へお客樣の時には、翁は囃子、仕舞、一調等を每々つとめた。他家へお供して勤めた事もあつたが、同時に師匠の能靜師の事が藩公へ聞えたのであらう。師匠と共に藩公の御前へ召出されて共々に勤めた事が度々であつた。

翁が能靜氏から『道成寺』『卒都婆小町』を相傳したのは此時であつた。それから後、翁の出精がよかつたのであらうか。それとも能靜氏が、自分の死期の近い事を豫覺したものであらうか。最も重き習物、望月、石橋までも相傳したのであつたが、此處に困つた事が一つ出來た。

これ程に師匠から見込まれて、大層な奧儀まで讓られたのに對しては、弟子として相當の謝禮をしなければならないものである。勿論能靜氏は、そんな積りで敎へたのでは無かつたであらう。廢れて行く能樂の眞髓、別して自分の窮めた喜多流の奧儀を、せめて九州の一角にでも殘して置きたいといふ一念から翁を見込んで相傳したものに違ひなかつたであらうが、それでも德義に篤い只圓翁としては、そのまゝに過ごす事が出來なかつたのであらう。しかも僅か十五圓五十錢ぐらゐの薄給では到底師恩栢當の禮をつくす事が出來ないので非常に苦惱ししたらしい。

しかし、さりとて他所から借金して融通する樣な器用な眞似の出來る翁ではないので、とう〳〵思案に詰まつた上、黑田家奧頭取の處へ翁自身に出頭して實情をありのまゝに申述べ、金子借用方をお願ひしたところ、何を云ふにもお氣に入りの翁が、一生に一度の切なる御願ひといふので殿樣も、その篤實な志に御感心なすつたのであらう。御內々で金十圓也を謝禮用として賜はり、ほかに別段の思召として金子其他を頂戴したので翁は感泣して退出した。大喜びで本懷の禮を盡したといふ。翁が如何に師匠能靜氏から見込まれて居たか。同時に又藩公から如何に知遇されて居つたかゞ此事によつても十分窺はれる。

然るに同年五月廿四日、豫てから不快であつた能靜氏が、重態となつたので、態々翁を呼寄せて書置を與へたといふ。

その書置の內容が何であつたかは知る由もないが『師恩の廣大なることを忘却仕間敷』と翁の手記に在る。尙引續いた翁の手記に

『明治四年辛未十月下拙（翁）退隱。榮家督。其後榮病死す。只圓のみ相續す』

と在る。此前後數年の間に翁は二つの大きな悲痛事に遭遇したわけである。

明治十一年春（翁六十二歳）長知公御下縣になり、福岡市内藝院、林毛、黒田一美殿下屋敷（今の原町林毛橋附近南側）といふのに滯在された。御滯在中幾度となく翁を召されて囃子半能等を仰付られた。

其後、長知公が市内濱町別邸（現在）に住はれる樣になつてからも、御裝束能、御囃子等度々の御催しがあり御反物金子等を頂戴した。

明治十三年三月三十日、翁六十四歳の時に又も上京したが、此時翁は在福の門下から鈴木六郎、河原田平助兩人を同行した。多分藩公、御機嫌伺ひの爲と師匠の墓參りの爲であつたらう。

此時の在京中藩公の御前は勿論喜多流の能樂堪能（皆傳）と聞こえた藤堂伯邸へも度々召出されて御能お囃子等を仰付られた。

その時長知公の御所望で石橋をつとめた事があると云ふ。舞臺は判然しないが、その石橋で翁の相手をした人々は寶生新朔、清水然知、清水半次郎、長知公。一噌要三郎と記錄されてゐる。何れもが、其時の脇師囃方中の名譽の人々であつたことは說明する迄もない。

かくて無上の面目を施した翁は四月六日東京出立、同二十七日無事歸縣したが、此時の上京を前後として翁の藝風が新く圓熟期に入つたものでは無いかと思はれる理由がある。勿論翁の斯道に對する研鑽と、不退轉の猛練習とは晩年に到つても懈る事が無かつた筈であるが、しかし此の以後の修養は所謂悟後の聖胎長養時代で、此前の六十餘年は翁の修業時代と思ふのが適當のやうである。

すなはち翁は此前後に重き習物の能を陸續と披露してゐる。

▼明治六年（五十七歳）望月

▼同　七年（五十八歳）正尊、景清

▼同十一年（六十二歳）卒都婆小町

▼同十三年（六十四歳）石橋（前記）

▼同十四年（六十五歳）赤頭道成寺、定家

此の明治十四年の『定家』披露後は明治廿五年まで『翁六十五歳より七十六歳に到る）格別の事も無かつたらしい。何等の記錄も殘つてゐないが、しかも此の十年ばかりの間こそ、翁が藝道保存の爲に最慘憺たる苦楚を嘗めた時代で、同時に翁の眞面目が最もよく發揮された時代であつた。

明治十四年から同二十五年の間と云へば、維新後滔天の勢を以て日本に流れ込んで來た西洋文化の洪水が九天直下の急潮を渦卷かせてゐる時代であつた。人間の魂までも舶來でなければ通用しなくなつて居た時代であつた。

人々は吾國個有の美風である神佛の崇拜、父母師友の恩義を忘れて個人主義、唯物主義的な權利

義務の思想に走ること行燈とラムプを取換へるが如く、琴三味線、長唄淨瑠璃を蹴飛ばしてピアノバイオリン、風琴、オルガンを珍重すること傘を洋傘に見換へる如くであつた。朝野の顯官は鹿鳴館に集まつて屈辱ダンスの稽古に夢中になり、洋行歸りの尊敬される事神樣の如く、怪しげな洋服ステツキ金時計が紳士の資格として紋付袴以上の尊敬と信用を拂はれた事は無論であつた。

かうした淺ましい時代の勢ひを眞實に回顧し得る人々は國粹中の國粹藝術たる能樂がその當時如何に衰微の極に達してゐたかを容易に肯肯されるであらう。その當時の能樂は全く長押の槍長刀以上に無用化してしまつて、誰一人として顧みる者が無かつたと云つても決して誇張では無いであらう。

事實、維新直後から能樂各流の家元は衰微の極に達し、こんなものは將來廢絶されるにきまつてゐるといふので、古物商は一寸四方何兩といふ裝束を燒いて灰にしてその灰の中から水銀法によつて金分を採る。能面は刀の鍔と一緒に捨値で西洋人に買はれて、西洋の應接室の壁の裝飾に塗込まれるといふ言語道斷さで、能樂は此時に一度滅亡したと云つても過言でなかつた。

能評家の第一人者坂元雪鳥氏の記錄する處を見ても思ひ半に過ぐるものがある。

專門の技藝の外には、世間に役立つ程の學才智能があるのでは無し、錢勘定さへ知らない程に世事に疎かつた能役者は幕府の祿こそ多くなかつたが、諸大名からの夥しい扶持を得て前記の如き贅澤な安逸に耽つてゐるのであるから、すべての祿に離れて、自活を餘儀無くされた能役者の困惑は言語に絶するのであつた。中には蓄財のあつた家もあるが、靜にそれを守り遂げる事が出來ないで、馴れない商賣で損亡を招く者が多く、又蓄える事を知らなかつた人々は、急轉直下して極端な貧窮狀態に陷る外無かつたのである。

其頃の事を目の當り見聞した人も漸く少くなつたが、其窮狀を語る話は數々あつた。何とも轉向の出來ない者は手內職をするとか、小商賣を開くといふのであつたが、內職と云つても團扇を貼るとか楊枝を削るといふ程度で、それで一家を支えるなどは思ひも寄らない事であつた。商賣と云つても家財を店先に竝べて古道具屋を出す位で、それも一般家庭に役立つ物は少く、已むを得ず二束三文に賣り飛ばすと、あとは商品を仕入れる餘裕が無いから、屠屋同樣になつて店を仕舞ふといふ有樣であつた。明治時代の大家と呼ばれた人の中に夜廻りをやつて見たり、植木屋の手傳ひをして見たりした人もある。芝居役者と共同の興行をやつて見て、遂にその方へ這入つた人もある。

といふ實に今から考えても夢のやうな慘憺たる時代であつた。

かうした傾向の中心たる東京の眞只中で窮乏に安んじながら能樂を捨てなかつた翁の恩師能靜氏の如きは實に鶏群中の一鶴と稱すべきであつたらう。

もとより生一本の能樂氣質の翁が、かうした能靜氏の風格を慕ひ繼いだ事は云ふ迄も無い。

翁は九州に歸つて後、さうした慘憺たる世相の中に毅然として能樂の研鑽と子弟の薫育を廢しな

かつた。野中到氏（翁の愛娘千世子さんの夫君で、後に富士山頂に測候所を建て有名になつた人）と、翁の緣家荒卷家からの扶助によつて衣食してゐたとは云へ全く米鹽をかへりみず。謝禮の多寡を問はず獻身的に斯道の扇揚の爲に精進した。

七八つの子供から六十歳以上の老人に到るまで苟も翁の門を潛るものは一日も休む事なく心血を傾けて指導した。その敎授法の嚴格にして周到な事、格を守つて厘毫も忽にしなかつた事、今思つても襟を正さざるを得ないものがある。（後出逸話參照）

さもしい話ではあるが、さうした熱心な敎育を受けた弟子が、謝禮として翁に捧ぐるものは盆と節季に砂糖一斤干鮑一把程度の品物であつたが、それでも翁は一々額に高く押戴いて『はあゝ……これはこれは……御念の入りまして……』

と眼をしばたゝきつゝ頭を下げたものであつた。無慾篤實の人でなければ出來る事で無い。

そればかりでない。

翁は市内櫛田神社（素戔男尊、奇稻田姫を祭る）光雲（藩祖兩公を祀る）その他の神事能を、衷心から吾事として主宰し、囃方、狂言方、其他の稽古に到るまで一切を指導準備し、病を押し、老衰を意とせず齋戒沐浴し、衣服を改めて、眞に武士の戰場に出づる意氣組を以て當日に臨んだ。之は普通人ならば正に酔狂の沙汰と見られる處であつたらうが、これを本分と覺悟してゐる爺の態度は誰一人として怪しむ者も無く當然の事として見慣れてゐたくらゐ眞劍に恪勤したものであつた。

これも逸話に屬する話かも知れぬが、當時の出演者はシテ方ワキ方は勿論、囃方と云はず狂言方と云はず、見物人の批評を恐るゝ者は一人も居なかつた。たゞ樂屋に控へてゐる翁の耳と眼ばかりを恐れて戰々兢々として一番一曲をつとめ終り、翁の前に禮拜してタツタ一言『おゝ御苦勞……』の挨拶を聞くまでは殆んど生きた心地も無かつたと云つても甚だしい誇張では無かつた。その當時十二三か四五程度の子供であつた筆者でさへも大人の眞似をして翁の顏色ばかり心配してゐたものであつた。

かやうにして毅然たる翁の精進によつて此の九州の一角福岡地方だけは昔に變らぬ嚴正な能樂神祭が繼續された。囃し方、狂言方は勿論の事、他流……主として觀世流の人々までも翁の風格に感化されて、眞劍の努力を以て能樂にいそしんだ形跡がある。甚だしきに到つては元來上懸の發聲と假名扱ひを以て謠ふ可き觀世流の人々までが滔々として翁一流の下懸式呂張を根柢とした豪壯一本調子な喜多流擬ひの節調を學び初め、觀世流の美點を沒却した憾があつた。

かやうな翁の無敵の感化力が如何に徹底したものがあつたかは、後年觀世流を學んでゐた吉村稱

氏が翁の歿後一度上京して歸來するや

『福岡の觀世流は間違つてゐる。皆只圓先生の眞似をして喜多流の節を謠つてゐる。觀世流は上懸で聲の出所が違ふのだから節も違はなければならぬ。』

と大聲疾呼して大いに上懸式の謠方を鼓吹した一事を以てしても十分に察せられるであらう。

日本の偏鄙福岡地方の能樂を率ゐて洋風滔々の激流に對抗し、毅然として此の國粹藝術を格守し敬神敦厚の美風を支持したのは翁一人の功績であつた。翁は福岡の誇りとするに足る隱れたる偉人高士であつたと斷言しても、決して過當で無い事が、茲に於て首肯されるであらう。

同時に其間に於て翁が如何に酬いられぬ努力を竭し、人知れぬ精魂を空費して來たか。國粹中の國粹たる能樂の神髓を體得して之を人格化し凛々たる餘德を今日に傳へて來たが。その渾然たる高風の如何に凡を超え聖を越えて居たかを察する事が出來るであらう。

明治廿五年（翁七十六歳）九月、先師喜多能靜氏の年回（二十五回忌）として追善能が東都に於て催さるゝ事となつた。

當時東京では喜多流皆傳の藤堂伯其他の幹旋により、現十四世喜多流家元六平太氏、當時幼名子代造氏が能靜氏の血緣に當る故を以て若冠ながら家元の地位に据わり異常の天分を抽んで、藤堂伯其他の故老に就て古儀法式を學んでゐた。しかも前記の通り家元として傳へられた能樂の用具は僅かに張扇一對といふ。全然、空無虛無に等しい狀態から喜多流今日の基礎を築く可く精進し初めてゐる時代であつた。

ところで、その能靜氏の追善能に就いては只圓翁にも上京して呉れる樣に喜多宗家から度々掛合つて來たので、翁は無上の名譽として上京したが、早速藩公長知公の御機嫌を伺ひに喜多家へも伺つたところ、其後、千代造氏（六平太氏幼名）と、翁と同行にて霞が關へ出頭せよといふ藩公からの御沙汰があつた。

ところが出仕してみると華族池田茂政、前田利嶷、皇太后宮亮、林直康氏か來て居られて、色々とお話の末、池田、前田兩氏が親しく翁を召されて『新家元、千代造の輔導の大役を引受けて呉れぬか』といふ懇な御言葉であつた。

その當時の前後の狀況は筆者は詳しく知らないが、何れにしても此の依頼が翁に取つて非常な重責であつたことは云ふ迄も無い。

しかし此時の翁の立場から見ると徒らな俗情的な挨拶や謙遜を以て己を飾るべき場合でなかつたやうである。翁も亦、能靜氏の恩命を思ひ、流儀の大事を思ひ、翁の本分を省み、且つ、依頼者の知遇を思へば、引くに引かれぬ場合と思つたのであらう。

『重々難有御言葉。何分老年と申し覺束なき事に存候。しかし御方樣よりの仰せに付、畏まり奉

る。まことに身に餘る面目老體を顧す滯京、千代造稽古の儀御請申上候』

と翁の手記に在る。

同年一月十九日芝能樂堂で、亡能靜師の追善能があつた。翁も能一番（當麻？）をつとめた筈であるが、その當時の記錄は今、喜多宗家に傳はつて居る事と思ふ。

その後毎日もしくは隔日に翁は飯田町家元稽古場に出て千代造氏に師傳を傳へ、又所々の能囃子に出席する事一年餘、明治二十六年十一月に歸縣したが、何を云ふにも、流儀の一大事、翁の一生の名譽あるお稽古とて此間の丹精は非常なものがあつたらしい。もつとも現六平太氏が、千代造時代に師事した人々は只圓翁一人では無かつた。又熊本の友枝三郎翁も、千代造氏輔導役の相談を受けたのを、平に謝絶して只圓翁に讓つたといふ佳話も殘つてゐる。又只圓翁以外の千代造氏の輔導役は幼少の千代造氏を遇する事普通の弟子の如く、嵩にかゝつた手嚴しい薫育を加えたものであるが、之に反して只圓翁は極めて叮嚀懇切なものがあつた。何事を相傳するにも平たく、物靜かに包み惜しむ處がなかつたので、却つて得る處が些ないのを怨んだといふ佳話が殘つてゐるさうであるが、その邊にも禮節格式を重んずる翁一流の謙虛な用意が窺はれて云ひ知れぬ床しさが偲ばれるやうである。因に此時の只圓翁の上京問題に就ては當時在京の内田寛氏（信也氏父君）米田與七郎氏（米田主殿頭令兄）が甚ながら非常な盡力をされたさうである。

尚此時に翁は能樂裝束附の大家齋藤五郎藏氏に就いて裝束附方を傳習した。尤も齋藤氏は初め翁を田舍の貧弱な老骨能樂師と思つたらしく中々傳習を承知しなかつたさうであるが、現家元其他の熱心な盡力によつてやつと承知した。現家元嚴君故宇郷鶴五郎氏（能靜氏愛婿）は屢々只圓翁の裝束附お稽古の爲に呼出されてお人形に使はれたといふ。

その時代の事に就いて六平太氏は雑者にもこんな追懷談をした。前記の只圓翁の心用意を裏書きするに足るであらう。

『只圓は私を敎えて呉れた他の故老たちと違つて、傲つた意地の悪い處が些しもなく、極めて叮嚀懇切に稽古をして呉れましたよ。不審な點なぞも勿體ぶらずにスラ〳〵と滯りなく說明して呉れました。』

なほ六平太氏は只圓翁について語る。

『色々思ひ出す事も多いですが、只圓は字が上手でしたからね。私から賴んで家元に在る裝束の疊紙に裝束の名前を書いて貰ひました。只圓は裝束の僅少な田舍に居たものですから大した骨折では無いとタカを括つて引受けたらしいのです。ところが、口廣いお話ですが家元の裝束と申しましても仲々大層なものでね。先づ唐織から書き初めて貰ひましたのを、只圓は何の五六枚と思つて疊を磨つてゐたのがアトから〳〵際限もなく出て來る、何十枚となく抱え出されるので餘程難いたら

しいですね。閉口しながらウン〳〵云つて書いて居りましたつけ。』

『酒は好きだつたらしいですね。私は七五三に飲みますと云つて居りました。多分朝が三杯で晝が五杯で晩が七杯だつたのでせう。小さな猪口でチビ〳〵やるのですからタカは知れて居りますがそれでも飲まないと工合が悪かつたのでせう。『今日は朝が早う御座いましたので三杯をやらずに家を出まして、途中で一杯引つかけて參りました。申譯ありませぬ』と眞赤な顔をしてあやまり〳〵稽古をして呉れる事もありました。』

『面白いのは梅干の種子を大切にする事で（註曰。翁は菅公崇拜者）一々紙に包んで袂に入れて居りました。或る時私が只圓の着物を疊んで居る時に偶然にそれが出て來ましたのでね。開いてみると梅干の種子なので何氣なく庭先へポイと棄てたら只圓が恐ろしく立腹しましたよ。『勿體ない事をする』と云ふのでね。恐ろしい顏をして見せました。後にも先にも私が只圓から叱られたのは此時だけでしたよ』

云々……と。師弟の順逆。老幼の間の情愛禮讓の美しさ。聞くだに涙ぐましいものがある。

かくて新家元へ相傳の大任を終つた翁が、藩公長知侯にお暇乞ひに伺つた處、御垢付の御召物を頂戴したと云ふ。

因に翁の此時の歸京の際には、藤堂伯前田子林皇后太夫其他數氏の懇篤なる引留め運動があつたらしいが、翁は國許の門弟を見棄てるに忍びないからと云ふ理由で聊か無理をして歸つたらしい。しかも其以前から內々で引續いてゐた野中、荒卷兩家からの只圓翁に對する扶助は此以後も繼續されたので國許の門弟諸氏は其意味に於て荒卷野中兩家に對し感謝すべき理由がある事を此に書添えて置く。

明治三十三年の春頃であつたか、福岡名產、平助筆の本舖として有名な富豪、故河原田平助翁の還曆の祝賀能が二日間博多の氏神櫛田神社で催された。番組は記憶しないが、京都から金剛謹之介氏が下つて來て、その門下の土蜘、謹之介氏の松風、望月などが出た。筆者は其時十二歲で土蜘のツレ胡蝶をつとめた。

その謹之介氏の松風の時、翁は自身に地頭をつとめたが中舞後の大ノリ地で『須磨の浦半の松のゆき平』の『松』の一句を翁は小乘に謠つた。これは申合はせの時にも無かつたので皆驚いたらしかつたが、何事も無く濟んでから、シテの謹之介氏は床几を下つて『松の行平はまことに有難う御座いました』と翁に會釋したと云ふ。

明治三十七年十月八日九日兩日、門弟中からの發起で翁の八十八歲の祝賀があつた。能は兩日催

されたが、翁の眞筆の賀祝の短冊、土器、斗搔餅を合せて二百組ほど諸方に送つた。

二日の能が濟んだ後稽古所で祝宴があつた。能も祝宴も皆弟子中の持寄りで、極めて質素な平民的なものであつた。

明治二十五年四月一日二日の兩日太宰府天滿宮で菅公一千年遠忌大祭の神事能が催された。

此の大祭は催能前の二箇月間に亘つて執行されたもので、祭能當時は日本全國、朝野の貴顯紳士が參向したほかに、古市公威、前田利嗣子爵等が下縣して能を舞はれた。

同社に保管されてゐる番組を見ると、その能組の豪華盛大さと、之を主宰した翁の苦心が首肯されるばかりでなく、其の當時の翁の門下、當地方の能樂界一流どころの名前が歴然として殘つてゐる。現在生存して居られる知人故舊の人々の、思ひ出の種として、略するに忍びないから左に掲げて置く。

御能組（第一日）

◆**翁**　（シテ）梅津利彦　（三番叟）高原神留　（千歳）生熊生　（大鼓）高畠元永　（小鼓頭取）栗原伊平　（脇鼓）本松卯七郎、石橋英七　（笛）中上正榮

◆**老松**　（シテ）梅津朔造　（シテツレ）大賀小次郎　（ワキ）小畑久太郎　（ワキツレ）梅津昌吉　（大鼓）宮崎逸朔　（小鼓）河原田平助　（太鼓）國吉靜衞　（笛）杉野助三郎　（間）岩倉仁郎

◆**栗田口**　（狂言）野田一造、野村祐利、高原神留

◆**八島**　（シテ）山崎友樹　（シテツレ）戸畑宗吉　（ワキ）高木儀七　（大鼓）竹尾吉三郎　（小鼓）石橋英七　（笛）辻儀七　（間那須）高原神留

◆**抜實**　（狂言）岸本作太、在郷三五郎

◆**羽衣**　和合舞（シテ）古市公威　（ワキ）小畑久太郎　（ワキツレ）諸岡勝兵衞　（大鼓）吉村稱　（小鼓）河原田平助　（大鼓）國吉靜衞　（笛）中上正榮

◆**花盜人**　（狂言）岩倉仁郎、高原神留、野田一造、城戸甚次郎　秋吉見次、野村久、生熊生

◆**鞍馬天狗**　白頭（シテ）前田利嗣　（シテツレ）石藏利吉、石藏利三郎、加野宗三郎　（ワキ）西島一平　（大鼓）清水嘉平　（小鼓）栗原伊平　（大鼓）國吉靜衞　（笛）杉野助三郎　（間）野村祐利、在郷三五郎、生熊生

御能組（第二日）

◆**卷絹**　（シテ）梅津利彦　（シテツレ）梅津昌吉　（ワキ）西島一平　（大鼓）清水嘉平　（小鼓）藤田正慶　（太

鼓)國吉靜衛　(笛)杉野助三郎　(間)在郷三五郎

◆棒縛　(狂言)在郷三五郎、岩倉仁郎、高原神留

◆夜討曾我　(シテ)大野德太郎　(シテツレ)梅津利彦、小田部正次郎、藤田平三郎、楢崎德助、梅津昌吉、井上善作、諸岡勝兵衛　(大鼓)宮崎逸朔　(小鼓)粟原伊平　(笛)杉野助三郎　(間)在郷三五郎、生熊生

◆禰宜山伏　(狂言)野村祐利、岸本作太、野田一造、秋吉見次

◆花筐　(シテ)前田利兇　(シテツレ)　山崎友樹、安永要助　(ワキ)西島一平　(大鼓)吉村稱　(小鼓)河原田平助　(笛)中上正榮

◆鷺　(仕舞)梅津只圓

◆山姥　(囃子)　(シテ)南郷茂光　(大鼓)吉村稱　(小鼓)河原田平助　(太鼓)國吉靜衛　(笛)中上正榮

◆鉢木　(シテ)古市公威　(シテツレ)山田清太郎　(ワキ)小畑久太郎　(ワキツレ)吉浦彌平　(大鼓)高畠元永　(小鼓)齊村靈栖　(笛)中上正榮　(間)生熊生

◆圖罪人　高原神留、岩倉仁郎、生熊生、野村久、城戸甚次郎、秋吉見次

◆烏帽子折　(シテ)梅津作蔵　(シテツレ)白木半藏、上村又次郎、梅津昌吉、吉浦彌平、大野德太郎、小田部正次郎、藤田平三郎、井上善作　(ワキ)小出久太郎　(ワキツレ)諸岡勝兵衛　(大鼓)宮崎逸朔、(小鼓)上田勇太郎　(太鼓)國吉靜衛　(笛)辻儀七　(間)野村久、城戸甚次郎、野村祐利、岸本作太、

高原神留

●附祝言

この能の兩日、樂屋を指導監督してゐた翁の姿を見られた古市公威氏が歸途車中で嘆息しながら獨語賛嘆された。

『梅津只圓といふ者は聞きしに勝る立派な人物である。あの様な品位ある能樂師を余はまだ嘗て見た事がない』

といふ話柄が今日に傳はつてゐる。

明治四十一年頃から翁の身體の不自由が甚だしくなつて、座つて居られない位であつたが、それでも稽古は休まなかつた。

その明治四十一年か二年かの春であつたと思ふ。梅津朔藏氏が隅田川の能のお稽古を受けた。それは翁の最後のお能の稽古であつたが、翁は地謠座の前の椅子に腰をかけ、前に小机を置いて其上に置いた張盤を打つて朔造氏の型を見てゐた。地頭は例によつて山本毎氏であつたが、身體は弱つても翁の氣象は衰へぬらしく、平生と變らぬ烈しい稽古ぶりであつた。

ところが其の途中で翁が突然にウームと云つて椅子の上に反り返つたので近まはりの人々が馳け寄つて抱き止めた。それから大騒ぎになつて附近の今泉に住んでゐる櫛藤國手を呼んで來る。親類

に急報する。注射よ。藥よと云ふ混雜を呈したが、間もなく翁が寢床の上で正氣付き、氣息が常態に復して皆に挨拶し、權藤國手も安心して歸つたので皆ホッと愁眉を開いた。

ところが梅津朔造氏がその枕頭に手を突いて

『それでは、これでお暇を…』

と御挨拶をすると翁がムツクリ頭を擡げて左右に振つた。

『おお。朔造か、いかん〳〵。まだ歸ることはならん。今一度舞臺へ來なさい。あんなザマではいかん』

と云ひ出して頑として諾かない。

皆舌を捲いて驚き且つ惑うた。此の非凡な翁の介抱に顏を見合はせて困り合つたが、結局、翁の頑張りに負けて今一度、稽古を續ける事になつた。

門弟連中が又も舞臺に招集された。その中で、翁は元の通り椅子に凭れて稽古を續けたが、今度は疲れない樣に翁の胴體を帶で椅子に縛り付け弟子の一人が背後からシツカリと抱へて隅田川一番の稽古を終つた。

翁は、それ以來全く床に就き切りになつたが、それでも仰臥したまゝ夜具の襟元の處に脚の無い將棋盤の樣な板を置き張扇でバタ〳〵とたゝいて弟子の謠を聞いた。

明治四十三年の四月櫻の眞盛りに、福岡市の洲崎お臺場の空地（今の女專所在地）で九州沖繩八縣聯合の共進會があつた。頗る大規模の博覽會同樣のものであつた上に日露戰爭直後であつた爲非常な人氣で福岡名物、全市無禮講の松囃子が盛大に催されて賑つた。

翁の門下の人々は高齡で臥床中の翁に赤い頭巾と赤い胴衣を着せ俥で東中洲『菊廼家』（今の足袋の廣告塔下ビール園、支那料理屋附近）といふ料亭に運び、其處で食事を進めて後、その頃はまだ珍らしかつた籐の寢椅子に布團を展べて翁を横たへ、二本の棒を通し、人夫に擔架させ門弟諸氏が周圍を取卷いて、翁に共進會場を見物させた。

これは翁の門下岩佐專太郎氏の思ひ付であつたらしいが、全福岡市の稱讃を博し新聞にも翁の擔架姿が寫眞入りで大きく芽出度く書き立てられた。

翁の病臥後、門下の人々はさながらに基督門下の十二使徒のやうな勢で流勢の擴張に努力した。梅津朔造氏は南大牟田市を中心として三池地方に勢力を張り、山本毎氏は東田川郡を中心として伊田後藤寺に根を下し、炭坑地方を開拓した。

其他の門下諸氏も福岡市内外に門戸を張つて子弟を誘導し各神社の催能を盛大にしたが、一方に在福の連中の中でも既に三年間翁に師事してゐた故梅津正保氏等を含む一團の高弟連中は毎月一回

宛、村上彦四郎氏邸や、其他の寺院等で謠會を開いた。

その中心となつて指導してゐたのは齋田惟成氏（當時福岡地方裁判所勤務）で、その會を開く前日は必ず翁の枕頭に集まつて役割の通りに謠つて翁の叱正を受けた。萬一翁のお稽古が出來ない場合には會の方を延期するといふ眞劍さであつた。

その素謠會の席上で梅津正保君の調子が餘りに大きいので、調子の小さい河村武友氏が嫌つて前列に逐ひ遣つたといふ挿話などがあつた。

翁の臨終の前年頃になると、翁の老衰の程度が、時々段落を附けて深くなつたものであらう。出張教授をしてゐる梅津朔造氏や山本每氏等の處へ度々至急電報が飛んだ。

最初のうちは兩氏等も倉皇として翁の枕頭に駈け付けたが、その後同じ樣な至急電報が頻々として打たれたので、兩氏も自然と狼狽しなくなつた。さう急に死ぬ老先生では無いといふやうな一種の信念が出來たものらしかつた。

そのうち明治何年であつたか京都で何かの大能が催さるゝとかで、翁の狀態を知らぬ舊知、金剛謹之介氏から翁に出演の勸誘狀が來た。

その手紙を見た翁は直ぐに傍をかへりみて云つた。

『折角の案內じやけに行かう。まだ舞へると思ふけに京都迄行て、一生の思出に直面の遊行柳を舞ふて見やう』

傍の人々は驚いた。急遽門弟を招集して評議した結果、翁の健康狀態が許さぬ理由の下に翁を諫止してしまつた。萬事に柔順な翁は、此の諫止に從つたらしいが嘸かし殘念であつたらうと思ふ。かうした出來事には人道問題、常識問題等が加味して來るから一概には是非を云へないが、まことに翁の爲に、又は能樂の爲に殘り惜しい氣がして仕樣が無い。舞臺で倒れるのは翁の本懷であつたに違ひ無かつたのだから……後年熊本の友枝三郎翁が、雨月を舞ひ終ると同時に樂屋で急逝したことは心ある人々の讃嘆する處であつた位だから。

明治四十三年（翁九十四歳）日韓合併の年の七月二日、風雨の烈しい日であつた。

柴藤精藏氏（當時二十三歳）は朝から翁の所へ行つて謠のお稽古を受けてゐたが、その途中で翁が突然に『オーン』と唸り聲を上げた。同時に容態が急變したらしいので枕頭に居た老夫人と女中も狼狽して柴藤氏をして醫師を呼びに遣つた。

柴藤氏は狼狽の餘り跣足で戶外に飛出したが、風雨の中の非常な泥濘をズブ濡れの大汗で、權藤病院に馳せ付けて卷頭に掲げた翁の主治醫壽三郎先生を引つぱつて來た。

壽三郎先生の手當で翁の容態の急變は一時落付く事になつたが、壽三郎氏はその時既に『最早絕

望』と思つてしまつたと云ふ。だから冒頭に掲げた翁の臨終の逸話は、その翌日の事である。

翁の容態の急變が三度が三度とも能樂のお稽古の最中であつた事は翁の能樂師としての生涯の崇高さを一層悲痛に高潮させる所以ではあるまいか。

梅津只圓翁の逸話

翁の逸話として何よりも先に擧げなければならないのは翁自身の勉强の拔群さと、子弟の教育の嚴格さであつた。

翁は毎朝未明（夏冬によつて時刻は違ふが）に必ず起上つてタツタ一人で袴を着け、扇を持つて舞臺に出て自分で謠つて仕舞の稽古をする。翁の養子になつてゐた梅津利彦氏（現牟田口利彦氏）などは遠方の中學校へ行く爲に早く起きやうとすると、早くも翁の足踏の音が舞臺の方向に聞えるので又夜具の中へ潜り込んだといふ利彦氏の直話である。かうした刻苦精勵が翁の終生を通じて變らなかつた事は側近者が皆實見した處であつた。

前記の通り晩年、足腰が不叶ひになつて臥床するやうになつても、稽古人が來ると喜んで仰臥したまゝ夜具の襟元でアシラヒつゝ稽古を附けて遣つた。傍の人が、餘りつとめられると身體に障るからと云つて心配しても『何を云ふ。家業では無いか』と云つて頑として稽古を續けた。

◇

弟子に對する稽古の嚴重、愼重であつた事は、事柄が事柄だけに最も多く云ひ傳へられてゐる。殆んど數限りが無い位である。

翁の弟子には素人玄人の區別が無かつた。又弟子の器用、無器用年齢の高下、謝禮の多少なぞは一切問題にせずに、殆んど弟子をタ、キ殺し兼ねまじき勢ひで稽古を鍛ひ込んだ。一人も稽古人が來なくなつても構はない勢ひで殘忍、酷烈なタ、キ込み方をした。むろん御機嫌を取つて弟子を殖やさうなぞいふ氣は毛頭無かつたので、現今のやうな割間式お稽古の流行時代だつたら瞬く間に翁の門下は絶滅してゐたであらう。

翁のかうした稽古振の裡面にはよしや日本中の能樂が滅亡するとも、自分の信ずる能樂の格だけは斷じて崩すまい。その精神で上は神明に仕へ下は自己の修養に資しやうといふ無敵、潔白の自負といゝ加減な弟子を後世に殘して流風を墮落させては師匠の相傳に對して相濟まぬ。それよりも自分の門下を絶つた方が正しいといふ非常時的な大決心が一貫してゐた事が、明らかに認められる。

能樂は平時の武士道の精華である。舞臺はその戰場である。だから稽古は生命を棄てゝ藝道に生

望』と思つてしまつたと云ふ。だから冒頭に掲げた翁の臨終の逸話は、その翌日の事である。

翁の容態の急變が三度が三度とも能樂のお稽古の最中であつた事は翁の能樂師としての生涯の崇高さを一層悲痛に高潮させる所以ではあるまいか。

梅津只圓翁の逸話

翁の逸話として何よりも先に擧げなければならないのは翁自身の勉强の拔群さと、子弟の教育の嚴格さであつた。

翁は毎朝未明（夏冬によつて時刻は違ふが）に必ず起上つてタツタ一人で袴を着け、扇を持つて舞臺に出て自分で謠つて仕舞の稽古をする。翁の養子になつてゐた梅津利彦氏（現卒田口利彦氏）などは遠方の中學校へ行く爲に早く起きやうとすると、早くも翁の足踏の音が舞臺の方向に聞えるので又夜具の中へ潜り込んだといふ利彦氏の直話である。かうした刻苦精勵が翁の終生を通じて變らなかつた事は側近者が皆實見した處であつた。

前記の通り晩年、足腰が不叶ひになつて臥床するやうになつても、稽古人が來ると喜んで仰臥したまゝ夜具の襟元でアシラヒつゝ稽古を附けて遣つた。傍の人が、餘りつとめられると身體に障るからと云つて心配しても『何を云ふ。家業では無いか』と云つて頑として稽古を續けた。

◇

弟子に對する稽古の嚴重、愼重であつた事は、事柄が事柄だけに最も多く云ひ傳へられてゐる。殆んど數限りが無い位である。

翁の弟子には素人玄人の區別が無かつた。又弟子の器用、無器用年齡の高下、謝禮の多少なぞは一切問題にせずに、殆んど弟子をタヽキ殺し兼ねまじき勢ひで稽古を鍛ひ込んだ。一人も稽古人が來なくなつても構はない勢ひで殘忍、酷烈なタヽキ込み方をした。むろん御機嫌を取つて弟子を殖やさうなぞいふ氣は毛頭無かつたので、現今のやうな幇間式お稽古の流行時代だつたら瞬く間に翁の門下は絶滅してゐたであらう。

翁のかうした稽古振の裡面にはよしや日本中の能樂が滅亡するとも、自分の信ずる能樂の格だけは斷じて崩すまい。その精神で上は神明に仕へ下は自己の修養に資しやうといふ無敵、潔白の自負といゝ加減な弟子を後世に殘して流風を墮落させては師匠の相傳に對して相濟まぬ。それよりも自分の門下を絶つた方が正しいといふ非常時的な大決心が一貫してゐた事が、明らかに認められる。

能樂は平時の武士道の精華である。舞臺はその戰場である。だから稽古は生命を棄てゝ藝道に生

きる方便である。すなはち『捨身成佛』が藝道の根本精神でなければならぬ…といふのが翁自身のモツトーであり、數々の訓戒に含まれてゐる不言不語の點睛であつたらしい。次の様な逸話の數々が殘つてゐる。

◇

翁は初心者が復習する事を禁じた。新しい小謠を習つた青少年達が歸りがけに翁の表門を出ると直ぐに大きな聲で嬉しさうに連吟して行くのを聞付けた翁は、その次の稽古日に必ず訓戒した。

『お前達はあの様な自分勝手な謠を自分勝手に謠ふことはならぬ。必ず私の前に來て謠ひなさいさうせねば謠が崩れて悪い癖が付く。一度悪い癖が付くとなか〳〵直らぬものだ』

弟子達は皆恥ぢて小さくなつた。しかし、それでも謠ひ度いので、門を出ると翁に聞こえぬ位の小聲で謠つて、だん〳〵遠くなると大聲で怒鳴りながら家へ歸ると、いよ〳〵大得意になつて習ひ立ての小謠を謠つた。家人も梅津先生から習ひ立ての謠と云ふと謹んで聞いたものだと云ふ。

ところがその次の翁の稽古日に翁の前で復習させられると、直ぐに我儘謠を謠つた事を看破されて驚き且つ赤面した。

『そげな節をば誰から習ふたか。又、自分で勝手に復習しつらう』

と云ふのであつた。そのたんびに、子供心に『何處が違ふのだらう。習つた通りに稽古した積りだが』…と不思議に思ひ〳〵したと云ふ。（佐藤文次郎氏談）

◇

高弟梅津朔造氏はもう五十を越してゐた。斑白頭の瘠せこけた病身の人で、喘息が持病であつたが、頑健な翁によく舞臺の上で突飛ばされた。當時二十歳前後の屈強の青年であつた梅津利彦氏なども、やはり突飛ばされた組で、當時九歳か十歳であつた筆者ですらも其の例に洩れなかつた。

但筆者は幼少であつた故か、かうした體刑を受けた事は極めて稀であつた代りに『ソラ〳〵…又…又ツ』といふ大喝の下に遣り直させられた事が、大人よりも多かつた様に思ふ。

中の舞の初段の左右の型の處で氣が掛からないと云つて十遍ばかり遣り直させられてスツカリ涙ぐんだあとで利彦氏が同じ稽古（男舞）で又やり直し十數回の後、とう〳〵突飛ばされてしまつたのを見て、『出來ないのは自分ばかりじや無いな』と竊に得意になつた事もある。

翁の晩年の弟子の中で最も囑望されてゐたのは齋田惟成氏であつた。此人の稽古振りや能の舞ひぶりを筆者は在京中であつた爲めに、あまり見てゐなかつたが、よほど烈しいものがあつたと傳へ聞いてゐる。

やはり五十近かつた氏に、口の開き方が悪いと云つて張扇を突込んだり『首が縮む、シヤンとせよ』と云つて張扇で鼻の下からハネ上げて鼻血を出させたりしたといふ話である。しかもそれが冬

の極寒の時であつたと云ふから隨分辛かつたであらう。むろん其鼻血ぐらゐの事で稽古中止にはならない。齋田氏は襟元を血だらけにしたまゝ舞ひ續けたといふ。

◇

梅津朔造氏の安宅の披能露の時であつた。勸進帳が濟んで關所を越え、下曲前のサシ謠の處へ來るとシテの朔造氏がホツとしたものか急に持病の喘息が差込んで來て『たゝさながらに十餘人』の謠ひを謠ひさしたまゝ息を呑んでシテ座に平伏してしまつた。

そこで謠を誰が代りに謠つたか記憶しないが下曲を終り、ワキとの懸合ひに入ると、やつと朔造氏が氣息を繕つて顏色蒼然たるまゝ謠ひ出し、山伏舞を勤め終つたが、その焦瘁疲勞の狀は見るも氣の毒な位であつた。

朔造氏は幕に這入ると裝束のまゝ樂屋の疊の上に平伏して息も絶え〳〵に喘せ入つたが、その背後から翁が

『ええい……此のヒョロ〳〵辨慶……ヒョロ〳〵辨慶……』

と罵倒する大聲が、舞臺、見所は勿論、近隣までも響き渡つたので、觀衆は皆眼を丸くして顏を見合はせてゐた。

その時の筆者は十四五歳であつたらうか。何事かと思つて見所から樂屋を覗きに行つたものであつたが、その時の翁の聲と顏付の恐ろしかつた事を想起すると、今でも肌に粟を生ずる思がある。

◇

梅津利彦氏が十七八歳頃の事であつたらうか。右手に赤塗のお盆を持つて翁の後から舞臺に行くので子供心に何事かと思つて隨いて行つた。

元來利彦氏のお稽古は、翁が自分の藝の後繼者と思つてゐたのであらう。極度の酷烈を極めたものであつたので、私は見るに忍びない爲に滅多にお稽古を拜見せず、外で遊ぶ事にきめてゐたのであつた。

ところで舞臺に入つてみると『野守』の『切』のお稽古で、その稽古振りの猛烈なこと、とても形容の及ぶ處でない。武道、其他の勝負等の場合には、相手の調子によつて氣合ひが拔ける場合が無いとも限らないが、能の仕舞の如きは、體力、藝力の氣合ひが寸分の隙間もなく續いて行かねばならぬ。……その氣合ひを拔いて上手に舞はうと心掛けるのは負けて逃げるのと同じこと。喜多流では許さぬ。『それじやけに喜多流は六かしい』……と翁が人に話してゐた言葉を記憶してゐるが、正に其通りで、殊に『野守』の仕舞の如きは、その前後に見た翁の稽古の中でも最も峻嚴、酷烈を極めたものであつたやうに思ふ。舞臺面のモノスゴサに惹きつけられて、身動きも出來ず見て居るうちに、體を綏めたり、氣を拔く餘裕なんか只の一刹那も無いところを翁が敎育してゐる事が、子

供心にもハツキリとわかつた。

血氣盛んな利彦氏が渾身の氣合ひをかけて前進し、非常な勢ひで身をかはして踏み止まらうとするが、止まれない。腰が浮き上つてノメリさうになる。そこを全力を上げて踏み止まると、鏡代用の赤いお盆を持つ左手の氣が拔けてゐる。

翁は『ホラ〳〵ツ。それで鏡に見えるかツ』とか『鬼ぞ〳〵。地獄の鬼ぞ。鬼神ぞ〳〵。ヒヨロ〳〵腰の人間では無いぞ〳〵』と皮肉を怒號しながら滅多無性に張扇をタタキまくる。

利彦氏の顏は見る〳〵汗と涙にまみれて、肩は大浪を打ち、息は嵐のやうに伊吹き初める。精も魂も盡き果てながら舞ひ終つて片膝を突くと『さあ今一度舞へ、最後の氣合ひが途中で拔けちや詰まらん鬼ぞ〳〵。地獄の鬼神ぞ。ええか……おそろしや打火かゝやく鏡の面に……』とアシラヒはじめる。さながらの地獄の光景である。

そのうちに利彦氏の腰付が心氣の疲勞の爲いよ〳〵危くなつて來ると、とう〳〵翁か癇癪を起して、張扇を二本右手に持つてヒヨロ〳〵と立上つて來た。此の頃から翁は輕い中風の氣味で、右足を引擦つてゐたのであるが、利彦氏が突飛ばされた拍子に投出した赤いお盆を拾ひ取ると、翁は自身で朗々と謠ひながら舞ひ初めたが驚いた。

その身體の輕い事。まるで木の葉のやうにヒラ〳〵と身を翻へす。赤いお盆がそれこそサーチライトのやうにギラリ〳〵と輝きまはり屈折しまはる。おしまひに三尺ばかり飛上つて座つた翁の膝の下から起つた音響の猛烈だつたこと、板張が碎けたかと思つた。

『此通り……ようと（充分の意）稽古して置きなさい』

と窘めて置いて翁は筆者を振返つた。

『さあ。今度はアンタじや。敎盛じやつたのう』

『ハイ』

と答へたまゝ筆者は後見座に釘付になつて立上れなかつた事を記憶してゐる。あんまり固くなつて足がシビレて居たのだ。

◇

翁の皮肉も亦、尋常でなかつた。何やらの地謠の申合はせの時に、翁の居間の机の前に六七人並んで謠合はせながら翁に聽いて貰つてゐた。

その中の某氏（名前は預かる）が謠の文句をつないで居なかつたらしく小さな聲で地頭の謠につ付いて行つた。

それを聞き咎めた翁はアシライの手をピタリと止めて皆の顏を覗き込むやうに見ました。

『誰かいな。誰か一人小さい聲で謠ひ居るが聞き苦しうてたまらん。誰かいな』

とキョロ〳〵見まはした。ナアニ……翁は其の小さい聲の主をちやんと知つてゐたのであるが、特に窘める爲に故意と斯うした意地の悪い態度を執つたものである。

さうして幾度も〳〵根氣強く『誰かいな〳〵』を繰返してトウ〳〵『私で御座います』と白狀させた。

『怪しからん。充分謠が出來もせぬ癖に大切なお能の舞臺に出やうとするけに、他人に迷惑をかけて、要らざる恥を搔きなさる。その心掛がいかん。私は出來ませんと云ふて、何故最初から遠慮しなさらんかいな。鍛練に鍛練を重ねても十分につとまるか何樣か判らぬとがお能の常習じや。そげな卑屈な心掛で舞臺に出ても宜えものと思ふて居んなさるとな。私の眼の黑いうちは其樣な事は許さん。今度の地謠にはアンタ一人出席を斷る。此次から了簡を入れ換えて來なさい』

とう〳〵その場で某氏は抓みのけられてしまつた。

そのお能の當日の地謠の眞劍さと云ふものは恐ろしい位の出來であつたと云ふ。（故林直規氏談）

◇

或時やはり五六人の門下が並んで同吟してゐた。相當出來た人ばかりであつたが、その中の一人が正座した足趾の先で拍子を取つてゐるのを敏感な翁が發見した。

『コラ〳〵。お前は足の先で拍子をとり居らうが』

その人は愕然として色を失つた。翁は沸然として言葉を續けた。

『拍子謠はならぬと云ふのに何故コソ〳〵と拍子を取んなさるか。其樣に拍子を取つて謠ひ度いならほかの遊藝をば稽古しなさい。まつと面白かもんのイクラでもある』（桐山孫二郎氏談）

◇

度々筆者自身の事を書くので如何にも名聞がましくて氣が差すが平にお許しを願ひ度い。

筆者の祖父は舊名三郎平、黑田藩の應接方で後、濃圓と號し漢學を敎へて生活してゐた。私は生れると間もなくから其の祖父母の手一つで極度に甘やかして育てられたものであつた。

祖父は舊藩時代から翁のお相手のワキ役を仰付られ春藤流（今は絕えた）脇方の傳書聞書を持つてゐた。

そのせゐか祖父濃圓は非常と云ふよりも、むしろ狂に近い只圓翁の崇拜者であつた。筆者の父や叔父、親類連中は勿論のこと、同鄕出身の相當の名士や豪傑が來ても頭ごなしに遣り付ける。漢學者一流の頑固な見識屋であつたにも拘らず、翁の前に出ると、筆者が五遍ぐらゐお辭儀をする間、額を疊にスリ付けてクド〳〵と何か挨拶をしてゐた。まるで何か御祈禱をしてゐる樣であつた。

翁から何か云はれると、犬ならば尻尾を振切るくらゐ嬉しさうに

『ハイ。ハイ。ハイ〳〵〳〵〳〵……』

と云つてウロタヱまはつた。

その祖父灌圓は方々の田舍で漢字を敎へてまはつた上句、やつと福岡で落ち付いて筆者が大名小學校の四年生に入學すると直ぐに翁の許に追ひ遣つた。

『武士の子たる者が亂舞を習はぬと云ふのは一生の恥ぢや』

と云つた論法で面喰つてゐる筆者の手を引いて中庄の翁の處を訪ふて、翁の膝下に引据えて、サツサと入門させてしまつた。その怖い〳〵祖父が、翁の前に出ると、さながら廿日鼠の樣に一と縮みになるのを見て筆者も文句なしに一縮みになつた。封建時代の師弟の差は主從の差よりも甚だしくは無かつたかと今でも思はせられて居る位であつた。

まだ十歳未滿の筆者が、座つたまゝ翁と應待してゐると、祖父が背後からイキナリ筆者の頸筋を掴まへて鼻の頭と額をギユウと壘にコスリ付けた事があつた。禮儀が足りないと云ふ意味であつたらしい。

◇

筆者の祖父は馬鹿正直者で、見榮坊で、負けん氣で、誰にも頭を下げなかつたが、しかし只圓翁にだけはそれこそ生命がけで心服してゐた。

神事能や翁の門下の月並能の番組が決定すると祖父の灌圓は總髮に瞋虎帽、黃八丈に藤巴の拜領羽織、鐵色獻上の帶、インデン銀煙管の煙草入、白足袋に表付下駄、銀柄の舶來洋傘（筆者の父茂丸が香港から買つて來たもので當時として稀有のハイカラの贅澤品）といふ份裝で喰ふ米も無い、（當時一升十錢時代）貧窮のたゞ中に大枚二圓五十錢の小遣（催能の都度に祖父が費消する定額）を泄つて弟子の駈り出しに出かけたので祖母や母は可なり泣かされたものだと云ふ。

祖父はかうして翁門下の家々をまはつて番組を觸れまはる。舞臺の世話、裝束のまはりまで『其分心得候へ』を繰返して奔走しては出會ふ人毎に自分が行かないと能が出來ない樣な事を云つて居たらしい。二三十錢の會費を出し澁つたり、役不足を云つたり、稽古を厭がつたりする者があると歸つて來てからブン〳〵憤つて『老先生に濟まん〳〵』と涙を流してゐたといふ。

◇

その頃博多に梅津朔藏氏等の先輩で××といふ人が居たが、非常に器用な人で師傳を受けずに自分の工夫で舞つて素人の喝采を博してゐた。その人が翁の稽古を肯んぜず、色々と難癖を附けて翁を誹謗したので、祖父は出會ふ度に喧嘩をした。

『彼奴は流儀の御恩を知らぬ奴ぢや。お能で飯を喰ふて行き居るけに老先生も大目に見て御座るが、今に見よれ。罰といふものは彼の樣な奴に當るものぢや』

と口を極めて惡態を吐いてゐたが、あんまり度々云ふので筆者はその科白を暗記してしまつた。

どうやら××氏には祖父の方が云ひ負けてゐたらしい悪口ぶりであつた。

◇

筆者の祖父は裝束扱ひがお得意で、樂屋の取まはしが好きだつたらしい。舞臺から引込んで來ると、自分の裝束を脱がないまゝ他人の裝束を着けてゐる姿をよく見かけた。

月並能の後、一人頭二三十錢宛切り立てゝ舞臺で御馳走を喰ふのが習慣になつてゐたが御馳走と云つても味飯に清汁煮〻程度の極めて質素なものであつた。ところで、その席上で氣に入らぬ事があると祖父は只圓翁を促してサツサと席を立つた。

そのまゝ筆者の手を引いて歸る事もあつた。

『老先生に對して濟まぬといふ考えが無い。あいつは下司下郎ぢや』

と云ふ事をアトでよく云つたが何の事やら誰の事やらむろんわからなかつた。とにかく祖父は何もかも只圓翁を中心にして考へてゐたらしい。

◇

そんな譯で筆者は九歳から十七歳まで十年足らずの間翁のお稽古を受けた。

翁も亦そんな因緣からであつたらう。筆者を引立てゝ可愛がつて呉れて僅かの間にシテ、ツレ、ワキ役を通じて記憶え切れぬ位數多く舞臺を踏まして呉れたものであつたが、正直の處を云ふと筆者は最初から終ひまでお能といふものに興味を持つてゐなかつた。たゞ子供心に他人から賞められたり、感心されたり、祖父母から

『お能の稽古をせねば逐ひ出す』

と云はれるのが怖ろしさに、遊び度い一パイの放課後を不承無精に翁の處へ通つてゐたものであつた。實に相濟まぬ面目無い話であるが、實際だつたから仕方が無い。

翁も此點では氣付いてゐたと見えて、筆者が翁の門口を這入ると

『おゝよう來なさつた〳〵』

と云つて喜んで呉れた。別に褒美を呉れるといふ事も無かつたが、ほかの子供達とは違つた慈愛の籠つた叮嚀な口調で

『あんたは俊成忠度ぢやつたのう。よし〳〵。おぼえて居んなさるかの……』

と云つた調子で筆者の先に立つて舞臺に出る。

『イヨー。ホオー〳〵。イヨオー』

と一聲の囃子をあしらひ初めるのであるが、それがだん〳〵調子に乘つて熱を持つて來ると、翁の本來の地金をあらはしてトテモ猛烈な稽古になつて來る。私もツイ子供ながら翁の熱心さに釣込まれて一生懸命になつて來る。

『そら〳〵。左手〳〵。左手がブラ〳〵ぢや。ちやんと前へ出いて。肱を張つて。さう〳〵イヨオー。ホオー〳〵。ホオ。ホオウ』

『前途程遠し。思ひを雁山の夕の雲に馳す』

『さう〳〵。まつと長う引いて…イヨー。ホオ〳〵』

『いかに俊成の卿…』

『ソラ〳〵。ワキは其様な處には居らん。何度云ふてもわからん。コツチ〳〵』

と云つた鹽梅で双方とも知らず〳〵喧嘩腰になつて來るから妙であつた。

◇

翁は筆者のやうな鼻垂小僧でも何でも、眞正面から喧嘩腰になつて稽古を附けるのが特徴であつた。

張扇をバタ〳〵と昂いて『ソラ〳〵』と云ふ時は輕い時で笛の笙歌を『オヒヤラリヒウヤ』とタタキ附ける樣に云ふ時は筆者の氣が拔けて居るのを呼び醒ます爲であつた。もつとも最初は、それほど此の『ヒウヤ』が怖くなかつたが、そのうちに翁が唱歌を云ひながら立上つて來て『ヒウヤ』と耳の傍で憎々しく云ふと筆者を突飛ばしたので、それ以來此の『ヒウヤ』を聞くたんびにドキンとして緊張した。

◇

翁は甚だしく憤ると

『ホラ〳〵〳〵〳〵ッ』

と怒鳴つて立上りがけに上の總義齒を舞臺に吹き落すことがあつた。それを慌てゝ又、口の中へ拾ひ込んで立つて來るので、門弟連中の笑話になつてゐたが、その場になるとその見幕が恐ろしいので笑ひごと處ではなかつた。

◇

幾度も同じ舞ひの順序を間違えると翁はやはり立上つて來て、筆者の襟首を捉まえて舞臺を引きずりまはしながら

『ソラソラ廻り返し、仕かけ開き…今度が左右ぢや』

と云つた風に一々號令して教へ込んだ。翁に龜の子の樣に吊り提げられながら、その通りに手足を動かして行く筆者の姿は隨分珍な圖であつたらうと思ふ。翁は其の序に遺恨骨髓に徹してゐる筆者の頭を張扇でポンとたゝいて

『…片端から忘れるなあアンタは…此處には何の這入つて居るとな』

と皮肉つた事もあつた。

遺憾ながらその頃の筆者は頭の中に腦味噌が詰まつてゐる事を知らなかつたが、翁は知つてゐたと見える。

◇

一番情なかつたのは『小鍛冶』の稽古であつた。

筆者が十二歳になつた春と思ふ。光雲神社の神事能の初番に出ると云ふので、祖父母、筆者と共に翁も非常な意氣込であつたらしいが、それだけに稽古も烈しかつた。

當日まで一箇月ばかりは毎日のやうに中庄の翁の舞臺へ逐ひ遣られたものであつた。途中で溝の中の蛙をイヂメたり、白蓮華を探したりして、道草を喰ひ〳〵、それこそ屠所の羊の思ひで翁の門を潜ると、待ち構へてゐる翁は虎が兎を掠めるやうに筆者を舞臺へ連れて行く。『壁に耳岩のもの云ふ』。子供心にも面白くない初同が濟んで『そオれ漢王三尺のげゐの劍』といふ序になると、翁はそれから先の上羽前の下曲の文句の半枚餘りを『ムニヤ〳〵〳〵』と一氣に飛ばして『思ひ綻けて行く程に――イヨー。ホオ』とハツキリ仕手の謠を誘ひ出すのが通例であつた。

ところが生憎な事に舞臺の背後が、一面の竹藪になつてゐる。春先ではあるがダンダラ縞のモノスゴイ藪蚊がツーン〳〵と幾匹も飛んで來て、筆者の鼻の先を遊弋する。動きの取れない筆者の手の甲や向ふ脛に武者振付いて遠慮なく血を吸ふ。痒くてたまらないのでソーツと手を遣つて掻かうとすると、直ぐに翁の眼がギラリと光る。

『ソラ〳〵ッ』

と張扇が鳴り響いて謠は又も

『そオれ漢王三尺の・・・』

と逆戻りする。今度は念入りに退屈な下曲の文句が一々伸び〳〵と繰返される。藪蚊がますますワン〳〵と殖えて顔から首すぢ、手の甲、向ふ脛、一面にブラ下る。痒いの何のつて丸で地獄だ。たまらなくなつて又掻かうとすると筆者の手が動くか動かないかに又

『ソラ〳〵ッ』

と來る。『そオれ漢王三尺の』と文句が逆戻りする。筆者の頰に泪が傳ひ落ちはじめる。

何故此時に限つて翁がコンナに殘忍な拷問を筆者に試みたか筆者には今以てわからないが、何にしてもあんまり非道すぎた樣に思ふ。當日の光榮ある舞臺の上で、つまらない粗忽をしない樣に、シテの品位と氣位を崩させない樣に特に翁が細心の注意を拂つたものでは無いかとも思へる。或はその頃筆者の背丈が急に伸びた爲に、急に大人並に扱ひ初めたのだといふ祖母の解釋も相當の理由がある樣に思へるが、それにしてもまだ甘え切つてゐた筆者に取つては正直の處何等の有難味もない地獄教育であつた。たゞ情なくて悲しくて涙がポロ〳〵と流れるばかりであつた。

◇

とにかくそんなに酷い目にあはされて居ながら翁を恨む氣には毛頭なれなかつたから不思議であつた。たゞ縛られてゐるのと同樣の不自由な身體に附け込んで、ワン〳〵寄つて來る藪蚊の群が金輪際怨めしかつた。

だから或時筆者は稽古が濟んでから藪の中へ走り込んで、思ふ存分タタキ散らしてゐたら翁が見てホホホと笑つた。

『蚊といふ奴は憎い奴ぢやのう。人間の血を吸ひよるけに……』

◇

そんな目に毎日々々、會はせられるので筆者は

『もう今日限り稽古には來ぬ』

と思ひ込んで走つて家に歸つても、又あくる日になると祖父母に叱られ〳〵稽古に行つた。そんな次第で、やつと小鍛冶の上羽の謠になると型の動きが初まるので蚊責めの難から逃れてホツとした。

それから下曲が濟んで中入前の引込みの難しかつたこと

『……靜かに……靜かにッ……』

といふ翁の怒鳴り聲が暗い舞臺の中に雷のやうに反響して私を縮み上らした。又もワン〳〵と寄つて來る蚊の群を怖れ〳〵シテ柱をまはる時の息苦しかつたこと。

◇

それからやつと小鍛冶の後シテになつて翁と二人で臺を正面へ抱え出す。その上に翁が張盤を据ゑて翁は自分の膝で早笛をあしらひ初める。それがトテも猛烈なものでよく膝が痛まないものだと思ふうちにシテの出になる。

その時の運びの穴かしかつたこと。一度出來ても其次にはダレてしまつて出來ない。むろん今は出來ない處か記憶にさへ殘つてゐないが、しまひには翁が自分で足袋を穿いて來て演つてみせた。その白足袋の眼まぐるしく板に辷つてゆく緊張した交錯の線が今でも眼にはハツキリ殘つてゐる樣であるが、やはり說明も出來ず眞似も出來ない。

その序に翁は臺の上からビツクリする程高く宙に飛んで、板張りの上に片膝をスイントと突いて見せたが、これは筆者も眞似て大いに成功したらしい

『よし〳〵』

と賞められた。註をして置くが翁は滅多に藝を賞めた事が無い。『まあソレ位でよからう』とか『それでは外のものを稽古しやう』と云はれたら一生一パイの上出來と思つてゐなければならない

ので『よし〳〵』と云はれた人は餘り居ない筈である。

さて光雲神社神事能當日の私の『小鍛治』の成績はどうであつたか。翁は默つてゐたのでわからなかつた。たゞ祖父母は勿論、知りもしない人から色々な喰物を澤山に貰つた。饅頭、煎餅、豆平糖、おはぎ、生菓子、黑砂糖飴、白紙に包んだおすし、强飯なぞを中位の風呂敷一パイぐらゐ。もつとも二番目の七騎落の選平になつた半ちやん（故白木半次郎君）も大抵同じ位貰つてゐたからあんまり自慢にはならないが。

◇

因に此頃聞いた處によると其頃の筆者は恐ろしく小器用な謠で只圓門下に似合はないコマシヤクレた舞を舞つてゐたさうである。門弟たちが苦々しく思つて或る時翁に此事を訴えたら

『うむ。あれは濕圓（祖父）が教えるけに、あゝなるのぢや』

と不興げに答へたと云ふ。（宇佐元緒氏談）

◇

誰であつたか名前は忘れたが松風の能のお稽古が願ひ度いと申出た事があつた。翁は知らん顏をして

『おゝ。稽古して遣らん事も無いが。先づ謠を謠ふてみなさい』

といふ譯で初同を謠はせられた。本人こゝぞと神妙に謠つたが翁は聞き終ると

『それ見なさい。謠さへマンゾクに謠ひきらんで舞はうなぞとは以ての外…』

とキメ付けられたので、本人は何處が悪いのかわからないまゝ一縮みになつて引退つた。

（柴藤精藏氏談）

◇

梅津朔藏氏の歿後は齋田惟成氏が門下を牛耳つてゐたが、或る時門弟を代表して翁の前に出て

『皆今度のお能に松風を出して頂き度いと申して居りますが…』

と恐る〳〵伺ひを立てたところ翁は言下に頭を振つた。

『まあだ松風はいかん。花筐にして置きなさい』（宇佐元緒氏談）

◇

當時四國で一番と呼ばれた喜多流の謠曲家池內信嘉氏が或る時、わざ〳〵只圓翁を尋ねて來て、何かしら一曲聞いて貰つた。聞いたアトで翁はたゞ

『結構なお謠ひ――御器用なことで――』

とか何とか云つたきり何も云はない。それでも是非遠慮の無い處を…と請益したら只圓翁の曰く

『貴方のお謠ひはアンマリ拍子に合ひ過ぎる。それでは謠ひとは云はれぬ。謠ひは言葉の心持を

歌ふもので拍子を謠ふもので無い。拍子がちやんとわかつて居つて、それを通り越した自由自在な謠でなければ能の役には立たぬ』（林直規氏談）

◇

翁は單に稽古のみならず、樂屋内の禮儀にまでも到れり盡せりの嚴重さを格守してゐた。樂屋内で冗談でも云ふ者があると即刻に破門し兼ねまじき勢ひであつた。神事能の時など樂屋内で神社からの振舞酒を飲んで大きな聲を出す者などがあると、誰にも斷らずにサツサと杖を突張つて歸宅した。『不埒な奴だ。樂屋の行儀が悪うして舞臺が立派に出來ると思ふか。お能の精神のわからぬ奴どもの催すお能は受持てん』と云つて憤慨したり

『慰みに遣るのなら、ほかの藝を神様に獻上しなさい。神様に上ぐる藝は能よりほかに無い道理がわからんか。下司下郎のお能は下司下郎だけで芝居小舍でゞも演んなさい。神様の前に持つて來る事はならぬ』と頑張つて何と云つても聞かない。仲に立つた人や宮世話人を手古摺らせた事が毎度であつた。（野中到氏其他數氏談）

◇

次の様な例もある。

筆者が十二三歳の折、中庄の翁の舞臺で先代松本健三翁の追善能が催された。

筆者は其時、小袖曾我のシテを承つてゐたが、筆者の裝束を着けてゐた高弟の某氏（祕名）が筆者の小さなチンボコを指の先でチョイと彈ぢいた。筆者は直ぐに兩手で其處を押へて『痛い〳〵』と金切聲を揚げたので近まりに居た高弟諸氏がドツと笑ひ崩れた。

隣の居間から見て居た翁の顏色が見る〳〵變つた。某氏を呼付けて非常な見幕で叱責した。

『樂屋を何と心得て居るか。子供とは云へシテはシテである。シテは舞臺の神様で能の守本尊である。そのシテを戯弄するやうな不心得の者は許さぬ。直ぐに歸れ。一刻も樂屋に居る事はならぬ裝束は俺が付ける。歸れ〳〵』

と云つたやうな文句であつたと思ふ。

某氏は平あやまりに詫まつた。ほかの一緒に笑つた人々も代る〴〵翁に取做したので結局、翁の命令でその笑つた四五人の中老人ばかりが、床几に腰をかけてゐる筆者の前にズラリと兩手を支えてあやまつた。

『たゞ今は存じがけも無い御無禮を仕りまして…今後、決して致しませぬけに、何卒御勘辨を…』

筆者は弱つた。どうしていゝかわからないまゝ固くなつて翁の顏を見た。翁はまだ眉を逆立てたまゝ向ふから睨み付けてゐた。

◇

こんな風だつたから翁が恐れられてゐた事は非常なものであつた。實に秋霜烈日の如き威光であつた。

能の進行中すこし、氣に入らぬ事があると樂屋に端座してゐる翁は眼を据えて、唇を一文字に閉ぢた怖い顏になりながらムク〳〵と立上つて、鏡の間に來る。幕の間から顏を出して舞臺を睨むと不思議なもので誰が氣付くともなく舞臺が見る〳〵緊張して來る。

翁が物見窓から舞臺を覗いて居る時は、機嫌のいゝ時である事がその顏色で推量されたが、それでも何となく舞臺が引緊まつて來た。囃子方の聲や拍子が眞劍になり、地謠に張りが附き、シテが固くなつてヒヨロ〳〵したから妙であつた。實に靈驗アラタカと云はうか現金と形容しやうか。子供心にも馬鹿々々しい位であつた。

出演者自身の述懷によると…翁が覗いて御座るナ…と思つたトタンに囃子方は手を忘れ、地謠は文句を飛ばし、シテは膝頭がふるえ出したといふ。自分の未熟を翁に塗り付ける云ひ草であつたかも知れないが…。

◇

能管の金内吉平氏は翁の生存當時の能管の中でも一番の年少者で、體格も弱少であつたが、或時敦盛の男舞を吹いてゐる最中に翁が覗いて居るのに氣が付いたので固くなつたらしく笛がパツタリ鳴らなくなつた。それでも翁が恐ろしさに、なほも一生懸命に位を取りながら吹くとイヨ〳〵調子が消え〳〵となる。そこで死物狂ひになつてスー〳〵フウ〳〵と音無しの笛を吹き立てたが、とう〳〵鳴らないまゝ一曲を終へて、どんなに叱られるかと思ひ〳〵樂屋へ這入ると翁は非常な御機嫌であつた『結構々々。けふの意氣と位取りはよかつた〳〵』

と賞められた時の嬉しかつたこと…初めて能管としての自信が出來たといふ。(金内吉平氏談)

◇

前述のやうな數々の逸話は、翁一流の天邪鬼の發露と解する人が在るかも知れぬが、さうばかりでは無い樣に思ふ。

翁は意氣組さへよければ型の出來榮えは第二第三と考えてゐたらしい實例がイクラでも在る。

現在の型では肩が凝つたり、手首が曲つたり、爪先が動いたりする事を嫌ふ樣であるが、翁の稽古の時には全身に凝つてゐても、又は手首なんか甚だしく曲つてゐても、力が這入つて居りさへすれば端々の事はあまり八釜しく云はなかつた樣である。

只圓翁門下の高足、齋田推成氏なんかの仕舞姿の寫眞を見ても、その凝りやうは可なり甚だしいものがある。記憶に殘つてゐる地謠連中の、マチ〳〵に凝つた姿勢を見てもさうであつた。凝つて

〳〵凝り拔いて突つ張るだけ突つ張り拔いて柔かになつたのでなければ眞の藝でないといふのが翁の指導の根本精神である事が、大きくなるにつれてわかつて來た。

だから小器用なニヤケた型は翁の最も嫌ふ處で、極力罵倒しタタキ付けたものであつた。そんな先輩連の眞似をツイうつかりでも學ぶと、非道い眼に會はされた。

◇

翁が稽古中に先輩や筆者を叱つた言葉の中で記憶に殘つてゐるものを云はれた人名と一緒に左に列記してみる。アトから他人に聞いた話もある。

『お前が、そげな事をばするけにほかの者が眞似する。喜多流にはそげな左右は無い。何處で見て來たか……云へ……云ひなさい……馬鹿ッ』(梅津朔造氏へ)

『扇はお前の心ぞ。武士の刀とおなじもんぞ。チヤント兩手で取んなさい』(筆者へ)

『イカン〳〵。扇の先ばつかりチョコ〳〵させるのは踊りじや〳〵――。心が生きねば扇も生きん。お能ぞ〳〵……踊りじやないぞ』(筆者へ)

『俺が足の悪い眞似をお前がする事は要らん。お前はお前。俺は俺じや。馬鹿ッ』(梅津朔造氏へ)

『人に眞似されるやうな藝は本物じやないぞ』(梅津利彦氏へ)

＝シンミリした穏かな口調で＝『謠は藝當じやない。心持とか口傳とか云ふて加減するのが一番の禁物じや。私が教へた通りに眞直に謠ひなさい。心持とか口傳とか云ふものは無いものと思ひなさい。さうせぬと謠が下劣になる』(山本毎氏ほか地謠一同へ)

＝或る天狗能樂師の惡口を云つた後＝『能は芝居や踊りのやうに上手な人間が作つたものではない。代々の名人聖人の心から生まれたものじや。その人達の眞似をさせて貰ひよるのじや。出來ても自慢にはならぬ。自分のたしなみだけのものじや。それを自慢にする奴は先祖無しに生まれた人間のやうな外道じや。勿體無い奴じや』(梅津朔藏氏。山本毎氏等々へ)

＝或る囃方の惡口を云つて＝『彼奴のやうな高慢な奴が鼓を打つと向ふへ進まれぬ。後退りし度うなる』

＝光雲神社の鏡の間で囃子方へ＝『馬鹿どもが。仕手がまだ來んとに調べを打つて何になるか。貴樣達だけで能をするならせい。此の馬鹿どもが』

◇

筆者が夜討曾我のお稽古を受けてゐる時であつた。

後ジテの御所の五郎丸組討の場になるとキツト翁が立上つて來て、背後から組付いて肩の外し工合を實地に演らせる。それから五郎丸を投げ方の稽古であるが、投げ方が惡いと翁が途方も無い力でシツカリと獅嚙み付いて離れないので困つた。

これは最初筆者が、子供ながら翁の樣な老人を本氣に投げていゝかどうか迷つて躊躇したのが翁に惡印象を殘したのに原因してゐたらしい。實に意地の惡い不愉快な爺さんだと思つた。

そればかりでない。

遠慮の無い處を告白すると翁は總義齒をしてゐたのであるが、その呼吸が堪らなく臭い事を發見したので最初からウンザリした。背後から筆者の肩を抱締めたまゝ筆者の耳の處に顏を持て來て

『本氣で、本氣で投げんと不可ん。投げんと殺されるぞ。力一パイ。肩を外いて。さう〳〵』

といふソノ息吹きの臭いこと。とても息苦しくてムカ〳〵して來てしやうが無かつた。

◇

高弟梅津朔造氏の令息で、梅津昌吉といふ人が居た。今四谷の喜多宗家に居られる梅津兼邦君の父君であるが、翁の歿後は脇方專門のやうになつて居た。

元來無器用な人であつたらしく狂言から仕手方に轉向した上村又次郎氏と共にいつも翁から叱られるので有名であつたが、それでも屈せず撓まぬ勉强によつて福岡地方で押しも押されもせぬ師家になられた事實が、同時に有名であつた。

氏は、正直一圖な性格で、あんまり翁から叱られて、眞劍になり過ぎたらしく『虛眼』といふのになつてしまつた。虛眼といふのは、お能一番初まつてから終るまで一時間か二時間の間、眼瞬を一つもしないことで、昌吉氏が眞白くクワツと眼を見開いて舞臺の空間を凝視したまゝで居るのが矢張り只圓翁門下一統の中で名物のやうになつてゐた。

『昌吉は、あんまり一生懸命になり過ぎたんですね。あんなにしてゐると肝腎の眼が死んでしまひます。あんなのを虛眼と云つてね。時々ありますよ』

と現六平太先生が評された。

只圓翁は一生懸命になり過ぎる分ならイクラなり過ぎやうとも、出來損つても咎めなかつたので昌吉氏の虛眼もお咎めを免れたものと思ふ。

◇

これに引續いた話であるが、前記河原田平助氏の櫛田神社に於ける還歷祝賀能に『大佛供養』が出た。シテの景淸が梅津利彦氏でワキの畠山重忠が前記梅津昌吉氏であつた。

その頃互に二十代であつた兩氏の意氣組は非常なもので稽古もするぶん猛烈であつたが、サテ能の當日になると文字通り焦げ附く樣な暑さであつた。それに裝束を着けて舞ふのだから大變で

『名乘れ〳〵と責めかけられ』

と畠山が景淸を橋がゝりへ追込む時の如き、二人とも滿面夕立のやうな汗が烏帽子際から滴り落ちるのであつた。

揚幕を背にした景清の利彦氏は眞赤に上氣して、血走しつた眼を互ひ違ひにシガメつゝ流れ込む汗に眩まされまいとしてゐる眞劍な努力が見物人によくわかつた。之に對して畠山に扮した梅津昌吉氏は眞靑になつたまゝ、イクラ汗が眼に流れ込んでも瞬き一つしない。爛々と剝き出した眼光でハツタと景清を睨み据えたまゝ引返して舞臺に入り

『言語道斷』

と云つた。その勢ひのモノスゴかつたこと

『今日のやうな大佛供養を見た事が無い』

と樂屋で老人連が口を極めて賞讃したのに對し翁はタツタ一言

『ウフフ。面白かつたのう』

と微笑した。昌吉氏はズツト離れた處で裝束を脫ぎながら

『汗が眼に這入つて困りましたが橋がゝりに這入ると向ふの幕の間から先生の片眼がチラリと見えました。それなりけり氣が遠うなつて、何もかもわからん樣になりました』

と云つて皆を笑はせてゐた。

◇

或る時中庄の只圓翁の舞臺で催された月並能で、大賀小次郎といふ人が何かしら大癒ものを舞つた。

其後シテの時に何處からか舞臺に舞ひ込んで來た一匹の足長蜂が大癒の面の鼻の穴から匐ひ込んで出口を失つた苦し紛れに大賀氏の顏面をメチヤ〳〵に刺しまはつた。

大賀氏は氣が遠くなつた。しかし例によつて幕の間から翁が見てゐるのが恐ろしさに後見を呼ぶ事さへ忘れて舞ひ續けた。『舞臺は戰場〳〵』と思ひ直し〳〵一曲を終つた。

幕へ這入つて假面を脫ぐと大賀氏の顏が一面に腫れ上つて、似ても似つかぬ顏になつてゐるので皆驚いた。（紫藤精藏氏談）

◇

翁の門下の催能にワキをつとめた人は筆者の祖父漣圓以外に船津權平氏兄弟及その令息の權平氏が居た。觀世の關屋庄太郎氏も出てゐた。

そのほか他流の人で翁の門下同樣の指導を受けてゐた人々には觀世の不破國雄、山崎友來氏等がある。

しかし翁は他流の人や囃子方狂言方には、あまり八釜しい指導をしなかつた。翁が八釜しく云ふのは何と云つても喜多流の仕手方で、その中でも梅津朔造氏が一番激しくイヂメられたりコキ使はれたりした。

翁は事ある毎に

『朔造々々』

と呼んだ。その聲がトテモ大きくて烈しいので舞臺から見所まで筒抜けに聞こえた。

その聲が聞えると朔造氏は何處へ居ても直ぐに飛んで來て持病の喘息を咳入り〳〵翁の用を足した。翁の『朔造々々』は催能の際の名物であり風景であつた。

◇

粟生弘氏は翁の門下でも古株で相當年輩の老人であつたが、或る時新米の古賀得四郎氏が稽古に行くと大先輩の粟生氏が『簸の切り』の謠を習つてゐる。それが老巧の粟生氏の技倆を以つてしてもナカ〳〵翁の指南通りに出來ないので、何度も〳〵遣り直しを喰つて居る。新米の古賀氏は何の『簸』ぐらゐと思つてゐたのに案に相違して震え上つた。『簸』なぞを滅多に習ふものじやないと思つた。

そのうちに粟生氏が簸の切りの或る一個所をかれこれ二三十遍も遣直させられたと思ふと、老顔に浴びる樣に汗の瀧を流しながら、精も氣魂も盡き果てた體で謠本の前に兩手を突いて

『今日はこれ位で、どうぞ御勘辨を…』

と白旗を揚げた。古賀氏は今更に只圓翁の稽古腰の强いのに驚いてゐると翁は平然たる顔で、粟

生氏を一瞥して

『そげな事ぢや不可ん。良く稽古して置きなさい』

と誡しめてからクルリと古賀氏の方に向き直つてニコ〳〵した。

『アンタには彼の樣に云はんばい』(古賀得四郎氏談)

◇

藝の方も去る事ながら癇癖と稽古の嚴重さで正しく只圓翁の後を嗣いでゐたのは齋田惟成氏であつた。

翁の沒後師を喪つた初心者で齋田氏の門下に馳せ參じた者も些少では無かつたが、齋田氏の八釜しさが出鑑の譽があつたものと見えて、しまひには佐藤文次郎氏一人だけ居殘るといふ慘況であつた。

それでも餘りに齋田氏の稽古振りが酷烈なので夫人が襖の蔭からハラ〳〵しながら出て來て

『そんなにお叱りになつては…』

と諫めにかゝると齋田氏の癇癪が一層高潮した。

『女風情が稽古場に出入りするかツ』

と云つた見幕で一氣に撃退してしまつた。

『叱られて習ふたお謠ひじやけに、叱つて教えねば勘定が合はぬ』

などと門弟に云ひ譯をする事もあつた。

其後齋田氏は勤務先の福岡裁判所から久留米に轉勤するとタツタ一人殘つてゐる門弟佐藤文次郎氏の爲にワザ〳〵久留米から汽車で福岡まで出て來て稽古をして遣つた。弟子よりも先生の方がよつぽど熱心であつた。

その稽古腰の強いこともたしかに翁の衣鉢を嗣いでゐた。（佐藤文次郎氏談）

◇

翁の門下には名物と云はれてゐた人が三人在つた。一人は間邊某といふ人で、梅津朔造氏、山本毎氏等の先輩に當り、筆者などは全然顏も知らない。謠が實に立派で、蔭で聞いて居ると只圓翁と間違ふ位であつた。いつも翁の能の地頭を拜命してゐた高足であつたが、同じ翁門下の地頭格山本毎氏と爭ひ、非常に憤激して自宅に歸り謠曲の本を全部燒棄して二度と翁に見えなかつた。

（宇佐元緒氏談）

詳しい事情は判明しないが、眞鍋氏の斯樣な態度は栗山大膳以來の片意地な黑田武士の本色であつたと同時に只圓翁門下の頑固な氣風を端的に露出したものであつたと云ふ。（林直規氏談）

◇

今一人は現教授佐藤文次郎氏の姻戚に當る吉本董三氏で、美髭を生やした眉の太く長い、眼と口の大きい、いかにも豪傑らしい風貌の巨漢であつた。

氏は金貸を業としてゐたにも似合はず、翁の爲に獻身的に働く純情家であつた。何か費用の要る事があるとお能の際に、樂屋から觀衆席を巡回して目星しい人間を片端から引捕へて、自身の山高帽を突付けながら喚めき立てた。

『貴公は金持じやけに五圓出しなさい』

『あんたも三圓ぐらゐ奮發しなさい』

『お前は一圓に負けるけに出せ。ナニ無い。横着な事を云ふ。墓口をば開けて見い』

と云つた調子で有無を言はさず捻ぢ上げて行くので能率の上る事非常であつたと云ふ。

しかし能の方は滅法好きな癖に天下無敵の下手であつた。翁がイクラ教へても其通りには決して出來なかつたし、自分でも諦めて居たと見えて思ひ切つた蠻聲を張上げて思ふ存分、勝手氣儘な舞ひ方をした。長刀を持たせると大喜びでノサバリまはつて危險此上も無いので地謠が皆中腰で謠つたと云ふ。流石の只圓翁も此人物には兜を脱いで居たらしく稽古の時にも決して叱らなかつた。

のみならず同氏が地謠に坐つて謠ひながら翁の前で行燈袴をまくつて、毛ムクジヤラな尻から太股まで丸出しにして痒い處をバリ〳〵と掻きまはる樣な事があつても翁は見ないふりをしてゐた。

こんな人物は多分翁の苦手であつたらう。いつも翁の事を『爺が〳〵』と呼棄てにしてゐたので皆『吉本のキチガヒ』と云つて居た。實に愛すべき豪傑であつた。（柴藤宇佐兩氏談）

◇

モウ一人只圓翁の苦手が居た。これは本人が現存して居るから特に姓名を遠慮するが、此人も可なりの無器用で、同時に相當の天狗樣であつたらしい。或時はじめて翁に謠のお稽古を願つたら翁は一應稽古を附けて後ブツスリと云つた。

『モウお前は稽古に來るには及ばぬ。私はお前の先生にはアンマリ上等過ぎる』

これは二三人から聞いた話だから事實として此處に書いて置く。腹が立つと、それ位の事は云ひ兼ねない翁であつたから。

ところが感心な事に、その劣等生氏は、それでも斷然屁古垂れなかつた。それ以來降つても照つても頑强に押しかけて來たので、翁も其の熱心に愛でたものであらう叱り〳〵稽古を付けて遣つたが、翁が歿前可なりの重態に陷つて、稽古を休んでゐる時までも毎日〳〵執拗に押かけて來て、枕元で遠慮なく本を開いて謠ひ出したので、とう〳〵翁が腹を立てた。

『さう毎日來ては堪らん。大概にしなさい』

稽古腰のあれ程强い翁に白旗を上げさせたのは古往今來此の人一人であらう。同氏は現在梅津正利師範の手で有傳者に取立てられて、大勢の弟子を持つて居てなか〳〵忙しいと云ふ。

◇

翁は痩せた背丈の高い人であつた。五尺七八寸位あつた樣に思ふ。日に燒けた頑健な肉附と何處から見ても達人らしい風格を備へたシヤンとした姿勢であつた。肩が張つて肋骨が出て皺だらけの長大な兩足の甲に眞白い大きな座胼がカヂリ付いてゐた。

冬は地味な、粗末な綿入の上に澁茶色のチヤン〳〵コ、茶色の小倉帶。紺飛白の手縫足袋。客が來ると其上からコオリ山（灰白色の紬の一種）の羽織を羽織つた。

麻製澁色の胸當て（金太郎式の）は夏冬共に離さなかつた。

◇

後頭部に心持黃色い白毛が半月型に殘つてゐるのを綺麗に櫛目を入れてゐた。顏は長大で、鼻が西洋人みたやうに鷲型で白い眉が房々として、高い小鼻の左右に眼窩が深く落凹んで、心持ち內斜視の老眼が鋭く光つてゐた。口は大きく一文字に閉ぢて凹んだ兩眼と、巨大な顎と共に一歩も退かぬ一徹の氣象をあらはしてゐた。

横頰から特に前頭部へかけて黑い斑の長生癥が群着してゐた。又首筋へ勞働者でなければ見受けられない深い皺が重なり合つてゐたが、之は翁自身の過激な肉體的習練の結果か、又は好物の畠イ

ヂリと網打ちの結果では無かつたらうかと思はれる。

要するに健康そのものゝやうにガツチリと逞しい、聲の太い、大きな爺さんであつた。

◇

稽古日は二五八、三六九の日に分けて四の日七の日十の日が翁の休日であつたらしい。何かの都合で、その休みの日に行くと翁はセツセと野菜畑で働いてゐたりしたが、直ぐに足を洗つて來て稽古をして呉れた。休み日だからと云つて決して悪い顔をしたり稽古を斷つたりしなかつた。

初めて小謠を習ひに行くと、翁は半紙を一帖出して自分で紙縒をひねつて綴ぢる。それから墨を磨つて表紙に『小謠』と書いてその右下に弟子の姓名を書く。その一枚をめくつて

『サア何がよからうのう』

なぞとニコ〳〵獨言を云ひながら、二句ぐらゐの簡單な和吟に胡麻節を附けたのを書いて投與へる。それを疊の上に置いて待つてゐると、翁が机の横から這ひ出して來て眞正面に坐る。

『さう〳〵。チヤンと兩手を膝に置いて』

とお行儀を敎へながら二度程繰り返して附けて呉れる。それでも出來ないと、蠅打の柄や、張扇で頭をビシヤリとたゝく事もあつた。

その次に來ると今一度謠はせられて悉なく記憶えてゐると又一つ新しいのを書いて貰へる。すこし上達して來ると

『節の附かんとも時々は良からう』

と云つて文句ばかりを書いて呉れることもあつた。最初は面喰つたが後には慣れて來た。

翁が書いて呉れた小謠本には略字や變態假名が多いので習つて歸ると直ぐに朱で假名を附けたものであつたが、翁は別に咎めなかつた。

◇

毎年一月の四日にはお鏡開きと云つて、お稽古に來る子供ばかりを座敷に集めて、翁が小豆雜煮（ぜんざいの樣なもの）を振舞つた。それがトテモ美味しくて熱いので喰つてゐる子供連は一人殘らず鼻汁を垂らしたのをスヽリ上げ〳〵して居た。

翁はニコ〳〵と眺めてゐた。（佐藤文次郎氏談）

◇

だん〳〵上達して來ると本番（全曲）を習ふ。

筆者は三歳ぐらゐから祖父に仕込まれて居て翁の處へ入門した時は數番の謠を丸暗記してゐたのでイキナリ本番を習つたものであつたが、むろん此方から曲目を撰む事は出來なかつた。翁が本人の器量に應じて次の月並能の番組を斟酌しながら撰んで呉れるのであつた。

翁の處へ稽古に行くと、玄關の上り框の處（机に向つてゐる翁の背後）に在る本箱から一冊引出して開いてくれる。時には

『その本箱を開けてみなさい。その何冊目の本の何と云ふ標題の處を開けてみなさい』

と指圖する事もあつた。

それを最初から一枚ぐらゐ宛、念を入れて直されながら附けて貰ふので、やはり二度ほど繰返しても記憶え切れないと叱られるのであつた。

その本はたしか安政二年版行の青い表紙で『ウキ』『ヲサヘ』や『ヤヲ』『ヤヲハ』又は廻はし節、呑み節を叮嚀に直した墨の痕跡と胡粉の痕跡が處々殘つてゐる極めて讀みづらい本であつた。

此の翁の遺愛の本は現在神奈川縣茅ケ崎の野中家に保存して在る筈である。

◇

翁は一番の謠を敎へると必ず其の能を舞はせる方針らしかつた。

筆者は九歳の時に鐘馗の一番を上げると直ぐにワキに出された。シテはたしか故大野德太郎君であつたと思ふが、お互に受持の言葉を暗記するかしないかに二人向き合つて申合はせをさせられたので間違ふたんびに笑つては叱られた。

そんな風であつたから筆者は小謠とか仕舞とか囃子とか云ふものが存在して居る事を可なり後まで知らずに過ごした。

◇

かうして習つては舞ひ〳〵した稽古順は大略左の通りである。之以て誠に名聞がましいが、何かの參考になるかも知れないと思つて記憶して居る通りを書き止めて置く次第である。

（一）鐘馗ワキ（二）同シテ（三）鞍馬天狗ツレ（四）經政（五）嵐山半能（六）俊成忠度（七）花月（八）敦盛（九）土蜘ツレ（十）卷絹ツレ（十一）小袖曾我（十二）夜討曾我（十三）小鍛治（十四）岩船半能（十五）烏帽子折子方（十六）田村（十七）殺生石直面（十八）羽衣ワキ（十九）是界（二十）蘆苅（二十一）旅（二十二）湯谷ツレ（二十三）紫清ツレ——但これは稽固だけで能は中止（二十四）船辨慶ツレ、及、海人子方同時（二十六）田村（二十七）土蜘——但稽固だけにて能は舞はず（以上）

其他清經シテ、三井寺ツレ等が四五番あつたと思ふが、ハツキリ記憶しない。

そのうちに十六七歳になつたので翁は舞臺に立つた筆者を見上げ見下してニコ〳〵した。

『ほう。これは大きうなつた。もう面をかけんとおかしいのう。面をかけると序の舞やら樂やら舞ふけに面白いがのう。ハテ。何に仕樣か。今度一度だけ小督にしやうか。うむ。小督にしやう〳〵。土蜘もえゝが糸の投げ樣がチツト六かしからう。』

筆者は土蜘が舞ひ度くて〳〵たまらなかつた。すつと以前に河原田翁の追善能で見た金剛某氏の

佛倒れや一の松への宙返りをやつて見たくて仕様が無かつたが、翁が勝手に小晉にきめてしまつたので頗る悲觀した。

その中に中學を落第しさうになつて稽古を休んだのをキツカケにとう〳〵翁の處へ行かなくなつた。唯湯谷のツレと景清のツレで面をかけて稽古した切り、シテとしては面を掛けずに終つた。

その永い間翁が筆者に傾注して呉れた精魂がドレ位であつたらうか。その廣大な師恩をアトカタも無く返上してしまつた不孝の程は悔いても及ばない今日である。

◇

いよ〳〵謠の稽古が濟むと、まだ文句のつながらないうちにサツサと舞臺にかゝる。

翁は筆者が謠ひ終つて本を閉ぢると（誰に對しても同樣であつた）張扇を二本右手に持つて

『サア』

と筆者を一睨しながら立上る。心持ち不叶ひな左足を引ずり〳〵舞臺に出る。此の頃から既に、お能の神樣、兼、カンシヤクの神樣が翁に乘り移つてゐた樣に思ふ。

◇

舞臺は京間では無かつた樣に思ふ。普通の六尺三間、橋がゝり三間で平生は橋掛共に雨戸がピツタリと閉まつて眞暗い。

鏡板の松は墨繪で、シテ座後方の鴨居に『安和堂』と達筆に墨書した木額が上げて在つた。たしか侯爵黑田長成公の筆であつたと聞いてゐる。

その雨戸を翁に手傳つて北と東と橋がゝりを各一枚宛開いて、あとを平均五六寸宛隙かす。それから翁はワキ座と地謠座のちやうど中間の位置に在る張盤の前に敷いた薄い茶木綿の古座布團上に坐る。

初めのうちは誰でもワキの言葉を云ふ翁に向つてアシラツたのでよく叱られた。翁の詞がいつでも眞劍だつたので、ツイ其方向に釣り込まれる傾向もあつた。

◇

ところで此方は幕の前に引返して立つて居ると翁は此方をジロリと見て、今一度『サア』と云ふ同時に一聲とか次第とかをアシラヒ初める。

『イヨオオ――。ハオオー〳〵』

と云ふうちに坦々蕩々たるお能らしい緊張味が薄暗い舞臺一面に漲り渡る。そのうちに大小の頭が來ると翁がソツと横目で此方を見る。見ない事もあるが、大抵見る場合が多いのだから其時に要領よく受けて出るので、後れたり早過ぎたりすると翁がパチ〳〵と張扇を叩いて今一度、一聲なり次第なりを繰返しながら道直させる。しかもそのタタキ加減が其日の低氣壓のバロメーターになるのでこれは老幼を問はず同樣の感想であつたらしい。

翁はアシラヒが中々達者で、役者が橋がゝりへ這入る時に打つ次第のヨセ工合がなか〳〵よかつたので囃子方が皆感心して耳を傾けたと云ふ。

◇

翁は普通の稽古を附ける場合には袴を穿かなかつた。これは謹嚴な翁に似合はぬ事であつたが事實であつた。荒い型をして見せる時には着流しの裾の間から白い短かい腰卷と黑い骨だらけの向脛が露出した。

◇

翁は張盤の前に正座した時必ず足の拇指を重ね合はせて居た。その重なり合つた拇指が何時動くかと思つて大野君と二人で翁の背後の脇棧敷から長い事凝視して居た事があつたが決して動かないので根負けした事があつた。

張扇は大抵眼の高さの處まで上げた。肱は兩脇から柔かく離し向ふへ伸ばして輕くバタ〳〵とたゝいた。肱から手首と張扇の尖端が柔かい一直線を描いて上つても下つても狂はなかつた。

張扇が張盤を離れるのと掛聲が起るのが同時だつたので、どうかすると張扇が聲を出してゐるやうな錯覺を感じた。遠くから見てゐると一層そんな感じがした。

張扇は必ず自分で貼つた。筆者も一度貼り方を習つたが忘れてしまつた。

『此の角の處をかうして・・・・』

と云ふ翁の壁だけが耳に殘つてゐる。

掛聲をかけたり、地謠を謠つたりしてゐるうちに、翁の上顎の義齒が外れ落ちてグワチヤリと下齒にぶつかる事が度々であつた。

『衣笠山・・・・グワチヤリ。モグ〳〵・・・・ムコヤ〳〵・・・・面白の夜遊や・・・・グワチヤリ・・・・・・モク〳〵・・・・ヨオチポホオポツポヨヲイチヨン・・・・ホラ〳〵しをり〳〵・・・・グワチヤリ・・・・モグ〳〵・・・・ホオ〳〵』

と云つた調子であつた。吾々子供連は、よく其の眞似をしてゐたものであるが、その中でも一番上手なのは故大野德太郎君であつた。

◇

毎朝翁は、暗いうちに起きて自分の稽古をする。それから利彦氏を起して稽古をつける。冬でも朝食前に一汗かかぬと氣持が惡かつたらしい。これは翁の長壽に餘程影響した事と思ふ。

◇

食事は三度々々粥食であつた。

『年を老ると身體を枯らさぬといかん』

とよく門弟の老人たちに云ひ聞かせたさうである。

◇

筆者が十四五歳の頃であつたか。

ある春の麗らかな日曜日の朝お稽古に行つたら、稽古が濟んでから翁は筆者を机の前に招き寄せて云つた。

『まことに御苦勞じやがあんた筥崎までお使ひに行て遣んなさらんか』

門下生は翁の御用をつとめるのを無上の名譽と心得てゐたので、筆者は何の用事やらわからないまゝに喜んで

『行つて來まつせう』

と請合つた。むろん翁も喜んだらしい。ニコ〳〵してもつと此方に寄れと云ふ。その通りにすると今度は兩手を突いて頭を下げよと云ふので、又その通りにすると翁は自筆の短冊を二枚美濃紙に包んで紙糊で縛つたものを筆者の襟元から襦袢と着物の間へ押し込んだ。

『それを持つて筥崎宮の二番目の中の鳥居の傍に在る何某（失名）といふ茶屋に行つて其處に居る禿頭の痩せこけた婆さんへ、その短冊を渡してオオダイを下さいと云ひなさい。オオダイ・・・・わ

かるかの』

『オオダイ』

『さう〳〵。オオダイ。それを貰ふたなら落さんやうに持つて歸つて來なさい』

『オーダイ』

『さう〳〵。オオダイじや。雷除けになるものじや。わかつたかの』

筆者は何となくアラビアン、ナイトの中の人間になつたやうな氣持で田圃通りに宮崎へ向つた。オオダイとは、どんな品物だらうと色々に想像しながら…

中庄から宮崎までタツプリ一里ぐらゐはあつたらう。途中の田圃には菜種の花が一面に咲いてゐた。渥てしも無く見晴らされる平野の家々に桃や櫻がチラホラして、雲雀があとから〳〵上つた。

瓦町の入口で七輪を造る土揑ねを長い事見てゐた。櫛田神社の境内では大道手品に人だかりがしてゐた。

宮崎松原にはまだ大學校が無かつた。小鳥が松の梢一パイに群れてゐたり、鵙が道を横切つたりした。少々淋しくて氣味が惡かつた。

かうしてすゐぶん道草を喰ひながら宮崎に着くと中の鳥居の横の茶屋は一軒しか無かつたので直ぐにわかつた。

中に這入ると三十四五の女房と、蓁みたやうな顏をした齒の無い婆さんが出て來た。いやに眼のギヨロリした婆さんであつたが、先に出て來て筆者を見上げ見下すと

『あんたは何しに來なさつたな』

と詰問した。なるほど頭がテカ〳〵に禿てゐる。着物のお蔭でやつと爺さんに見えないやうな婆さんである。

筆者は長い道中の間に用向きをハタと忘れてゐるのに氣が付いた。背中に短冊が這入つてゐる事なんか恐らく翁の門を出た時から忘れてゐたらう。どうして何の爲に來たかイクラ考へてもわからないので泣出し度くなつた。

頭の禿げた婆さんは口をモグ〳〵させながら、怖い眼付で筆者を今一度見上げ見下した。

『何處から來なさつたな』

『梅津の先生のお使ひで來ました。あの…あの…』

今度は貰ひに來た品物の名前を忘れてゐる事に氣が付いた。

婆さんは齒の無い口を一パイに開いて笑つた。

『アツハツ〳〵〳〵。オオダイじやろう』

『はい。オオダイ』

『ふうん。そんなら其處へ手を突いてみなさい』

筆者は上り框へ兩手を支いた。

『頭を下げなさい。さう〳〵』

婆さんは痩せ枯れた冷たい手で筆者の背中を探りまはして短冊を引つぱり出した、押頂いて眼鏡もかけずにスラ〳〵と讀んでから又押頂いた。

それから奥へ這入つて神棚の上から一本の薪の半分ばかりの燃えさしを大切さうに持つて來て、勿體らしく白紙で包んで、紙縒で結はえながら筆者の懷中に押込んで呉れた。

『よう來なさつた。これを上げます』

と云つて女房の持つて來た駄菓子の紙包みを筆者の手に持たした。筆者は懷中から薪の燃えさしを今一度引つぱり出して見まはした。恐らく妙な顏をしてゐた事と思ふ。

『これがオオダイだすな』

婆さんがうなづいた。

『うん〳〵。それはなあ。此の箱崎樣で毎年舊の節分の晩になあ。大松明を燃やさつしやる。その燃え殘りを頂くとたい。……これから夏になると雷神が鳴ります。その時に是を火鉢に燻べると雷神樣が落ちさつしやれんちうてなあ……梅津の爺さんは身體ばつかり大きい（コヒキ（褌引き：臆病者の意）じやけに雷神樣が嫌ひでなあ。毎年頼まれて短冊とカエキ（交易）しますとたい』

やつと理窟がわかつた筆者はホツとしながら、小學校の帽子を脱いでお辭儀しい〳〵歸途に就いた。何だか梅津の先生が非常に損な交易をして御座るやうな氣がして、此の婆さんが横着な怪しからぬ婆に見えて仕樣が無かつた。後から聞くと此の婆さんは只圓翁よりも高齢であつたと云ふ。上には上が在ると思つたが、しかし、どうした因緣で翁と識合ひになつたかは今以てわからない。

其時の事を思ひ出すと百年も昔のやうな氣がする。

◇

翁は滅多に外へ出かけない癖に天氣の事を始終氣にする人であつた。それは能を倦したり、網打ちに行つたり、歌を詠んだりする爲に自然と、そんな習慣が出來たのかも知れないが、そればかりでも無かつた樣に思ふ。

舞臺上の翁を見た人は翁を全面的に、傲岸不屈な一本槍の頑固親爺と思つたかも知れぬが、それは大變な誤解であつた。勿論能樂の事に關しては一流の定見を持つてゐて一切を斷定的にドシ〳〵事を運んだが、しかし日常の事に關しては非常に氣が弱くて夫人は勿論門人や女中にでも遣り込められると

『成る程のう。よし〳〵……』

と眼をつむつて云ふ事を聞いてゐた。

◇

恩に感する事なぞも非常に強く深かつた。愛婿野中到氏の言葉なぞは無條件で受容れてゐたらしい話が殘つてゐる。所謂蟲も殺さぬと云ふ風で、何か不本意な場合に立つたり、他人の不幸を聞いたりしてオロ〳〵聲になつて落涙して居る事も二三度見受けた位である。

これは翁の家人以外の人々には意外と思はれる話かも知れぬ。しかし、かうした性格があの舞臺上の獅子王の如き翁の半面に在る事を思ふ時、筆者は翁の人格がいよ〳〵高く、いよ〳〵深く仰げども及ばぬ心地がして來るのである。

翁はさうした氣の優しさを、いつも單純率直にあらはしてゐた。老人や子供には非常に細かく氣を遣つた。天氣が惡いと弟子の行き歸りに

『おゝ。シロ（辛勞）しからうなあ』

と眼をしばたゝいた。その云ひ方は普通人の所謂挨拶らしい感じが爪の垢ほども無かつた。心持ちカスレた眞情の籠もつた聲であつた。

◇

老夫人と差向ひの時に『お日和が斯樣續いては麥の肥料が利くまいのう』とか『惡い時に風が出たなあ。非道うならにや宜えが』

とか云つて田の事を心配してゐる事もあつた。

翁は自身で畠イヂリをするせゐか百姓の勞苦をよく知つてゐた。其點は筆者の祖父灌園なぞも屢々他人に賞めてゐた。

『老先生の話を聞くと太平樂は云はれんのう』

『ほんなこと。お能ども舞ひよると罰が當るのう。ハハハハ』

なぞと親友の桐山氏と話合つてゐた。

只圓翁が暴風模樣の庭に出て、うしろ手を組んで雲の往來を眺めてゐる。その云ひ知れぬ淋しい悲しげな表情を見た人は皆さうした優しい、平和を愛する翁の眞情を端的に首肯したであらう。

◇

翁の逸話はまだ〳〵後に出て來るのであるが、それ等の逸話を、たゞ漫然と讀むよりも、その逸話を一貫する翁の眞面目を、此邊で一應考察して置いた方が、有意義では無いかと思ふ。すなはちかうした翁の强氣と弱氣の裏表のどちらが翁の眞骨頭か。どちらが先天的で、どちらが後天的のものか、ちよつと看別出來ないやうである。

しかし只圓翁の性格の表裏が徹底的に矛盾して居る處に、世を棄てゝ世を捨て得ない翁の眞情が

一貫して流露してゐた事が今にして思ひ當られて、自ら頭が下るのである。聖人でも無ければ俗人でも無い。『恭儉持己、博愛及衆』の聖訓『上求菩提。下化衆生』の佛願が、渾然たる自然人、ありのまゝの梅津只圓翁の風格となつて、いつまでも〳〵尊とく、ありがたく、涙ぐましく仰がれるやうに思ふ。

現代の能樂師の如く流祖代々の鴻恩を忘れて、淺墓な自分の藝に慢心し、日常の修養を放漫にする。又は功利、卑屈な世間の風潮にカブレ、良い加減な幇間的な稽古と取持で弟子の機嫌を取つて謝禮を貪る。生活が樂になると本業の研究向上は忘れてセイラパンツを穿いてダンスホールに行く。茶屋小屋を飲みまはる。女性を引つかけまはると云つたやうな下司つぽい增長者は、かうした翁の謙德と精進に對して愧死しても足りないであらう。

眞の能樂師は僅少の例外を除き翁の後に絕えたと云つてもいゝ。憤慨する人があつたら幸である

◇

翁の藝風を當時の一子方に過ぎない筆者が批評する事は、禮、非禮の問題は別としても不可能事である。

しかし筆者としては及ばずながら此の機會に出來る限り僞はらざる感想を述べて置き度い。門外漢の田夫野人の言葉でも古名人の境界を傳へてゐる事が屢々あるのだから。同時に翁の藝風を知り過ぎる位知つて居られる現家元喜多六平太氏や、熊本の友枝御兄弟の批評などは容易に得られないと思ふから……。

◇

前記明治廿五年喜多能靜氏追善能の爲只圓翁は上京し、野中到氏宅に滯在してゐたが、翁は毎夜のやうに侯爵黑田長知侯のお召を受けて霞ケ關に伺候した。

その節のこと。或る時翁は藤堂伯（先代）から召されて蟬丸の道行の一調謠の御所望を受けたが相手の小鼓は名にし負ふ故大倉利三郎氏で、豫々翁の技倆を御存じの藤堂伯も非常な興味をもつて傾聽された。利三郎氏も內心翁を一介の田舍能樂師と思つてゐたらしいが、無事に一調が濟んでお次の間に退くと利三郎氏は餘程驚いたものと見えて、直ぐさま翁の前に兩手を支て

『實にどうも……』

と云つて他は云はず低頭挨拶したといふ。翁の實力を直接に評價する參考材料としては此の逸話がたつた一つ殘つてゐるきりである。但。野中到氏の手簡に

『右藤堂樣より伯父（只圓翁）歸宅後、小生今晩は何の御所望なりしやと問ひしに右樣の次第を話して、あの謙遜家にも聊か得意の色見え申候』

とある處を見ると、此の逸話は翁の生涯中の秀逸では無いかと思はれる。

◇

筆者は不幸にして裝束を着けた翁の舞臺姿を一度も見た事が無い。

たゞ一度翁の八十八賀能の前日の申合はせの夜であつたと思ふ。門弟中の地謠で翁が海人の仕舞を舞つたのを見た。そのほか日々の稽古や他人の稽古を直して御座るのを横から見た姿を思ひ合はせると翁の舞臺姿がどうやら眼前に彷彿される樣である。

甚だ要領を得難い評かも知れないが、翁の型を見た最初に感ずる事は、その動きが太い一直線といふ感じである。同時に少々穿ち過ぎた感想ではあるが、翁の藝風は元來器用な、柔かい、細かいものであつたのを盡く殺しつくして喜多流の直線で一貫した修養の痕跡が、何處かにふつくりと見えるやうな含蓄のある太い、逞しい直線であつた樣に思ふ。曲るにしても太い鋼鐵の棒を何の苦もなく折り曲げるやうなドエライ力を、その輕い動きと姿の中に感ずる事が出來た。

後年九段能樂堂で名人に準ぜられてゐる某氏の野守の仕舞を見た事があるが、失禮ながら彼の樣な天才的な冴えから來た擬古的な折れ曲りとは違ふ。もつと大きく深い、燃え上るやうな迫力を持つた…何となく只圓一流と云ひ度い動きであつた。

同じ野守でも只圓翁のは時間的には非常に急迫した、九天直下式の感じに壓倒されながら、あとから考へると誠にユツタリした神韻漂渺たる感じが今に殘つてゐる。

海士の仕舞でも地謠（梅津朔造氏、山本每氏）が切々と歌つてゐるのに翁は白い大きな足袋を靜かに〳〵運んでゐた身體附が一種獨特の柔か味を持つてゐた。且つ、その左足が惡い爲に右手で差す時に限つて身體がユラ〳〵と左に傾いた。その姿が著しくよかつたので大野德太郎君筆者等の子方連は勿論、門弟連中が皆眞似た。それを劈頭第一に叱られたのが前記の通り梅津朔造氏であつた

◇

シオリは今のやうに高くなかつた。シオリの高さは能によつて違ふ…と云つたやうな翁の訓戒が記憶に殘つてゐる樣にも思ふ。

そんな事が在るかどうか知らぬ。筆者の聞き違ひかも知れないが書添て置く。

◇

梅津朔藏氏の安宅の稽古の時に翁は自分で剛力の棒を取つて『散々にちやうちやくす』の型の後でグツと落ち着いて、大盤石のやうに腰を据えながら『通れとこそ』と太々しくゆつたりと云つた型が記憶に殘つてゐる。梅津朔藏氏が後で齋田氏と一緒に筆者の祖父を見舞ひに來た時に、祖父の前で同じ型を演つて見せたが

『此處が一番六かしい。私の樣な身體の弱いものには息が續かぬ。…芝居では無い…と何遍叱られたかわからぬ』

と云ふうちに最早汗を掻いてゐた。

それからずつと後、先年の六平太先生の在職五十年のお祝で『安宅』を拜見した時に、同じ處で行き方は違ふが、同じやうな大きな氣品の深い落付きを拜見して、成る程と思ひ出した事であつた。大變失禮な比喩ではあるが、とにかく恐ろしく古風な感じのするコツクリとした型であつたやうに思ふ。

◇

只圓翁の山姥と景清が絶品であつた事は今でも故老の語艸に殘つてゐる。これに反して晩年上京の際、家元の舞臺で、翁自身に進み望んで直面の景清を舞つたが、此時の景清は聊か可笑しかつたといふ噂が殘つてゐるが、どうであつたらうか。

鳥頭（シテ桐山氏）の仕舞のお稽古の時に翁は自身に桐山氏のバラ〳〵の扇を奪つて『紅葉の橋』の型をやつて見せてゐるのを舞臺の外から覗いてゐたが、その遠くをヂイツと見てゐる翁の眼の光りの美しく澄んでゐたこと。平生の翁には一度も見た事の無い處女のやうな眼の光りであつた。

◇

扇でも張扇でも殆んど力を入れないで持つてゐたらしく、よく取落した。

その癖弟子がそんな事をすると非道く叱つた。弟子連中は悉く不滿であつたらしい。

夏なぞは弟子に型を演つて見せる時素足のまゝであつたが、それでも弟子連中よりもズツトスラ〳〵と動いた。足拍子でも徹底した音がした。

平生は悪い方の左足を内蟇にしてヨタ〳〵と歩いてゐたが、舞臺に立つとチヤンと外蟇になつて運んだ。

型の方は上述の通り誠に印象が薄いが、之に反して謠の方はハツキリと記憶に殘つてゐる。謠本を前にして眼を閉ぢると翁の其の曲の謠聲が耳に聞こえる樣に思ふ。ところが自分が謠出してみると思ひもかけぬキイ〳〵聲が出るので悲觀する次第である。

何よりも先に翁の謠は舞ひぶりとソツクリの直線的な大きな聲であつた。むろん割鐘式では無い錆の深い、丸い、朗かな、何の苦も無い調子であつた。

梅津朔造氏の調子は凛々と冴える、假名扱ひの綺麗な、派出なものであつた。

山本每氏のは咽喉を開放した、九州地方一流の發音のハツキリし過ぎた、間拍子のキチンとしたもので、いつも地頭を承つてゐた。

桐山孫次郎氏のは底張りの柔かな含み聲であつた。一番穩當な謠と翁門下で云はれてゐた。

又齋田氏のは凝つた、響の强いイキミ聲で、謠つてゐる顏付きが能面のやうに恐ろしかつた。

梅津利彦氏のは聲が全く潰れた張りばつかりの一本調子でどうかすると翁の聲と聞き誤られた。

何れも翁の謠振りの或る一部分を傳へたものであつたらしいが、それ等の謠ひ盛りの一同の地謠の中に高齢の只圓翁が一人座り込むと、ほかの聲は何の苦もなく翁の樂々とした調子の中に消え込んで行つた。

吉本董三氏か大野仁平氏であつたと思ふ。

『先生の傍に座ると、イクラ氣張つても紡績會社の横で本綿車を引いて居るやうな氣持になる』

と云つて皆を笑はせてゐたが、全く子供ながらも、そんな感じを受けた。ツク〳〵翁の紡績會社振りに驚嘆させられてゐた。

喜多六平太氏は右に就いて筆者に斯く語つた。

『ナァニ。聲量の問題ぢや無い。只圓の張りが素晴らしく立派だつたからですよ。全く鍛練の結果あゝなつたのですね。ですから只圓が死ぬと皆が皆彼の張りの眞似をして間拍子を何も構はないで、たゞ死物狂ひに張上げるのです。これが只圓先生の遺風だ。ほんたうの喜多流だつてんで、二人集まると怒鳴りくらが初まる。お能の時など吾も〳〵と張上げて地頭の謠を我流でマゼ返すので百姓一揆みたいな地謠になつちまふ。その無鐵砲な我武者羅な處が喜多流だと思つて喜んでゐるのだから困りものですよ。』

又、梅津利彦氏（現牟田口利彦氏）は翁の型についてかう語つた。

『二十歳ぐらゐまではたゞ鍛はれるばつかりで、何が何やら盲目滅法でしたがそのうちにダンチン出來のよし悪しがわかつて來て、腹の中で批評的に他人の能を見るやうになりました。只圓の力量もだん〳〵わかつて來るやうに思ひましたが、同じ力と申しましても、只圓は何の苦もなく遣つてゐる樣ですからその積りで眞似をしてみるとすぐに叱られる。なか〳〵其通りに出來ないし、第一お能らしく無い事を自分でも感する。只圓の通りに遣るのにはそれこそ死物狂ひの氣合を入れてまだ遠く及ばない事がわかつてその底知れぬ謹嚴な藝力にヘト〳〵になるまで降參させられ襟を正させられたものでした。』

◇

牟田口利彦氏の話によると、翁は平生極めて氣の弱い、涙もろい性分で、家庭百般の事について角立つた口の利き方なんか滅多にしなかつたが、それでも能の二三月前になると何となく眼の光りが冴えて來て、口の利き方が嚴重になつた。大抵の事は大まかに見逃してゐたものが能前の昂奮期に入ると『それはいかん』と云ふ口の下から自身で立上つて始末したと云ふ。

かうして月並能であれ祭事能であれ、催能が近付いて來ると翁の態度が、何となく目に立つて昂奮して來るのであつた。能の當日になると夏ならば生帷子の漆紋（加賀梅鉢）に茶と黄色の細かい縱縞、もしくは鐵色無地の紬の仕舞袴。冬は郡山（灰色の絹紬）に同じ袴を穿いてゐた。皺だらけ

の咽喉の下の白襟が得も云はれず神々しかつた。

光雲神社の祭能の時は拜領の藤巴の紋の付いた、鐵色の紋付に、これも拜領物らしい、茶筋の派出な袴を穿いてゐる事もあつた。その時の襟は茶か水色であつた樣に思ふ。老夫人が能の前日廣袖の襦袢に火のしをかけて襟を附け換へて御座つた。

◇

稽古を離れると翁は實になつかしい好々爺であつた。地獄の鬼から急に極樂の佛樣に變化するのが子供心に不思議で仕樣が無かつた。たとへば八十八賀の時能のアトで

『元氣は元氣じやが、悴の方が先にお淨土參りしてしまうた。クニヤ〳〵になつて詰まらん』

と云つて門弟連中を絶倒させた。それから赤い頭巾に赤い緞子（であつたと思ふ）のチヤン〳〵コを引つかけて、鳩の杖を突いて、舞臺の宴會場から歸りしなに

『乳の呑みたい。乳のもう〳〵』

と七十歳近い老夫人に戯れたりした。

◇

『さあ飴を喰ふぞ』

と翁が云ふと老夫人が、大きな茶碗に水を入れたのを翁の前に捧げる。翁はそれに上下の義齒を入れてから水飴やブツキリ飴を口に掴み込んでモグ〳〵やる。長い翁の顏が小田原提灯を壓んだやうになるのを小謠組の少年連が不思議さうに見上げて居ると

『フム〳〵、可笑しいのう』

と云つて翁自身も笑つた。

しかしその飴を分けて貰れた事は一度も無かつた。喰ひ餘りを舊の通り叮嚀に竹の皮に包んで老夫人に渡すと、茶碗の中の義齒を靜かに頰張つて、以前の嚴格な顏に還つた。弟子の方を向いて張扇を構へた。

『モグ〳〵。さあ謠ひなさい』

◇

夕方になると翁は一合入の透明な硝子燗瓶に酒を四分目ばかり入れて猫板の附いた火鉢の上に載せるのをよく見受けた。前記喜多六平太氏の談によると翁は七五三に酒を飲んだと云ふが、これは晩の七の分量に相當する分であつたらう。

翁の嗜好は昔から淡白で、油濃いものが嫌ひと老夫人がよく他人に吹聽して居られた。

筆者も稽古が遲くなつた時、二三度夕食のお相伴をしたことがあるが、遠慮の無いところ無類の肉類好きの祖父の影響を受けた自宅の夕食よりも遙かに粗末な、子供心に有難迷惑なものであつ

た。

そのうちに翁は眞赤になつた顏を巨大な鍬だらけの平手で撫でまはして『モウ飯』と云つた。燗瓶には必ず盃一杯分ばかり殘してゐた。

◇

翁から直筆の短冊を貰つた人は隨分多いであらうと思ふ。筆者も七八枚持つて居たが、人々に所望されて現在卷頭の二枚しか殘つてゐない。

筆跡は卷頭に掲ぐる通り、二川樣に、お家樣、定家樣、唐樣等を加味したらしい雅順なものである。舞臺上の翁の雄渾豪壯な風格はミヂンも認められないが、恐らく翁の本性をあらはしたものであらう。歌意は歌詞と共に、能樂の氣品情操を一歩も出でない古風なもので月並と云へば、それまでゞあるが、翁はそれを短冊に自筆して人々に與えるのがなか〳〵の樂みであつたらしい。氣が向くと弟子の歸りを待たして置いて悠々と墨を磨りながら一二枚宛書いて與へた。

因に翁の和歌は誰かに師事したものには相違無かつたが、その師が誰であつたかは遺憾ながら詳でない。宇佐元緒、大熊淺次郎兩氏の談によると有名な大隈言道氏は翁の存命中翁の住家に近い藥院今泉に住んでゐたから、翁も師事してゐたかも知れない。その後、言道氏の舊宅に小金丸金生氏が住んでゐて、此人に師事して居たことはたしかであつたといふ。なほ此他に末永茂世氏が春吉に住んでゐたといふが、この人に學んだかどうかは詳でない。

福岡の人林大壽氏は奇特の人で、只圓翁の自筆の短冊數十葉を蒐集し、同翁の門下生に分與しやうとされたものが現在故あつて一纒めにして古賀得四郎氏の手許に預けられて居る。古賀氏の盡力で、表裝されて只圓翁肉筆の歌集として世に殘る筈である。翁の歌風を知るには誠に便宜と思ふからその和歌を左に掲げて置く。

行路荻　（八十七歳時代）

夕附日荻のはこしにかたむきて
ふく風さむしのべのかよひ路

歸雁　（八十八歳時代）

櫻さくおぼろ月夜にかりがねの
かへるとこよやいかにのとけき

河暮春

ちる花もはるもながれてゆく河に
なにをかへるのひとりなくらん

河暮春

大井河花のわかれをしとふまに
はるは流れて暮にけるかな

雉

春雨のふりてはれぬるやま畑の
すゝしろかくれ雉子なくなり

寒松風

枯はてしこすへはしらぬ夜あらしを
あつめてさむき松の聲かな

船中月

心なきあま人さへもをのつから
あはれと見えん船のうへの月

夏草

秋になく蟲の音きかんたよりにと
はらひのこしゝ庭の夏草

葵

とる袖にこそ露はかけけれ

夕春雨

椿ちる音もしすけき夕くれの
こけちの庭に春雨のふる

葵

加茂山にをふる二葉のあふひ草
とりかざしつゝ神まつるなり

夏草

はたちかふ牛のすかたも見えぬまで
しけりあひたる野への夏草

夕春雨

春雨のふるともわかで夕ぐれの
のきのしのふにつとふ玉水

庭菊

折とりてかさゝぬ袖もさく菊の
はなの香うつす庭の秋風

群　雁

いくつらの落きてこゝにあそふらん
堅田のうちにむるゝかりかね

庭　菊

くる人もなき菊そのゝ花さけば
はゝき手にとる庭の面かな

蚊遣火

蚊遣火はとまやのうちにたき捨て
しほのひかたにすむ海人の子

新年山

こそのはる花みし峯に年たちて
かすみもにほふみよしのゝ山

群　雁

（八十九歳時代）

治れる御代のしるしと大君の
みいけの雁の數もしられず

船中月

棹さしてうたふ聲さへすみにけり
つきになるとの浦の舟人

更　衣

人並にぬきかへぬれと老の身の
またはたさむき夏衣かな

夜　蛙

せとちかき苗代小田にかけやとす
月のうへにもなく蛙かな

埋　火

櫻炭さしそへにけりをもふとち
はなのまとひに春こゝちして

池　鷺　鷥

（九十二歳時代）

山かけの池の水さえ淺かれと
　ことしも來鳴をしの聲かな

寒　雁　啼

露霜のふかき汀の蘆のはに
　こゑもしをれて雁そ啼なる

春　木

しはしこそ梅をくれけれ春來ても
　いつかさくらと人にまたれつ

夏　獸

重荷おひてゆきゝ隙なき牛車
　なつのあつさに舌もこかれつ

友　獸

をく山の青葉をつたふ木のは猿
　つはさなき身も枝うつりして

名所戀

（九十三歳時代）

しのひねの、泪の波のかゝるか那
　つかしき妙の袖のみなとに

（九十四歳時代）

◇

茶の湯とか俳諧とか云ふ趣味は翁には無かつた樣に思ふ。處が最近知人武田信次郎氏から高川邦女子史の茶室で茶杓を取つた翁の態度に寸分の隙も無かつたので座中皆感じ入つたと云ふ通信があつた。筆者は聊か意外に思つて事の詳細を今一度同氏に問合はせた處折返して左の通返事が來たから、無躾ながら此處に拔き書きして貰ふ事にした。（原文のまゝ）

『高川邦子女史は高川勝太夫と申す士分の息女にて令妹藤子女史と共に幼稚園小學校等の教師を勤め姉妹ながら孝行の由聞之候。東瀛禪師に參禪し南坊流の茶道を究め南坊錄を全寫し大乘寺山内の居に茶室を營まれ候。（中略）同庵の茶室の爐椽は奥州征討の際若松城下よりの分捕として有名なりしが、今は其の茶室の跡もなく爐椽も何處へ傳はり候や不明、姉妹共故人となられ其後の事存じ申さず候。只圓翁の茶事に疎かりし事は御說の通りに候。そこに只圓翁の儉さが出て來るのに候。只圓翁の茶の手前は決してうまいものにては無かりし筈に候。それに唯翁が茶杓の一枝を手に取りて構へられたる形のみが嚴然として寸毫の隙を見せざる其の不思議さは何の姿に候ぞと人々はこの點を驚嘆せしものに候。南坊流の始祖南坊禪師は茶道の墮落を慨して茶事を捨て去つて再び世に出で

す。その終る處を知らず候。茶道は能樂以上の技巧の末に走り富裕人の弄びものに墮ちつくし全く其精神を亡し候。斯る世に藝術の神とも仰ぐ可き能樂家只圓翁が茶道に接すれば自然に紛々たる技巧の墮氣を破つて卓然その神をこの茶杓の形に示現せしめしものと存候。（下略）』

又翁が博多北船の梅津朔造氏宅に出向いた際、折節山笠の稚兒流れの太鼓を大勢の子供が寄つてたゝいて居るのを翁が立寄つて指の先で撥を作つて打ち方を指導して居た姿が、何とも云へず神々しかつたといふ逸話もある。（前同氏談）一道に達した人だから大抵の事はわかつたのであらう。

書畫骨董の趣味も鑑識は在つたに相違ないが生活が質素なせいか格別、玩弄した事實を見聞しなかつた。勝負事なんか無論であつた。

◇

一面に翁はナカ〳〵器用だつたといふ話もある。翁の門下で木原杢之丞と云ふ人が福岡市内荒戸町に住んでゐた。餘程古い門下であつたらしく翁が舞つた安宅のお能を見たさうで『方々は何故に』と富樫に立ちかゝつて行く翁の顏がトテモ恐ろしかつた……とよく人に話してゐたといふ。

その木原氏の處へ翁が或る時屏風の張り方を習ひに來た。平面の處や角々は翁自身の工夫でどうにか出來たが蝶番ひの處がわからないので習ひに來たのであつたといふ。

その時に翁は盃二三杯位遣入る小さな瓢箪を腰に結び付けて來てゐたが、屏風張の稽古が一通りわかると其の瓢箪を取出して緣側で傾けた。如何にも嬉しさうであつたと云ふ。（栗野達三郎氏談）

◇

明治廿八年頃知人（門下？）大山忠平と云ふ人が居た。なか〳〵の親孝心な人で老母が病臥してゐるのを慰める爲眞宗の『二世安樂和讃』を讀んで聞かせる事が毎度であつた。

老母は大の眞宗信者で且、只圓翁崇拜家であつたが或る時忠平氏に

『お前の讀み方では退屈する。只圓先生に節を附けて貰ふたらなあ』

と云つた。忠平氏は難しい註文とは思つたが、ともかくも翁に此事を願ひ出ると、元來涙脆い翁は一も二もなく承諾して、自分で和吟の節を附けて忠平氏に敎へて遣つた。（栗野達三郎氏談）

◇

翁の愛婿、前記野中到氏が富士山頂に日本最初の測候所を立てゝ越冬した明治二十六年の事、翁は半紙十帖ばかりに自筆の謠曲を書いて與へた。『富士山の絕頂で退屈した時に謠ひなさい』と云ふので暗に氏の壯擧を援け度い意味であつたらう。その曲目は左の通りであつた。

柏崎、三井寺、櫻川、弱法師、葵上、景淸、忠度（囃子）鵜飼、遊行柳（囃子）

野中氏は感激して岳父の希望通り此一冊を友としつゝ富士山頂に一冬を籠居したが、其時に景淸の『松門謠』に擬した次の樣な戲れ謠が出來たと云つて、古い日記中から筆者に指摘して見せた。

『氷雪堅く閉ぢて。光陰を送り。天上音信を得ざれば。世の風聲を辨へず。閣々たる石窟に蠢々として動き、食滿々と與へざれば、身心堯骨と衰へたり。國の爲捨つる此身は富士の根の〳〵雪にかばねを埋むとも何か恨みむ今はたゞ。我父母に背むく科。思へば憂しや我ながら。いづれの時かなだむべき〳〵。』

此戯謔の文句を見ると野中到氏は兩親の諫止をも聽かず、富士山頂測候所設立の壯擧を企てたものらしい。さうして只圓翁の凜烈の氣象は暗に之に贊助した事になるので、翁の愛孃で絶世の美人と云はれた到氏夫人千代子女史が、夫君の後を趁うて雪中を富士山頂に到り夫君と共に越冬し、滿天下の男女を後に擡着せしめた事實も、さもこそとうなづかれる節があるやに察せられる。

◇

翁は家のまはりをよく掃除した。畑を作つて野菜を仕立てた。

畑は舞臺の橋がゝり裏の茶の畝と梅と柿とハタン杏の間に挾まつた數十坪であつた。手拭の折つたのを茶人みたやうに禿頭に載せたり淺い姉さん冠り式にしたりして、草を拐つたり落葉を掻いたりした。熊手を振りまはして、そんなものを掻き集めて畑の片隅で燒肥を燒いて居る事もあつた。

大抵素跣足で尻をからげてゐた。

毛蟲と蛙はさほどでもなかつた蛇を見付けると

『おお〳〵。喰付く〳〵ぞ。打ち殺せ〳〵』

と指をさして逃げまはつた。

◇

翁の家の門は槇の生垣の間に在る、小さな土壁の屋形門であつた。只圓翁の筆跡で書いた古い表札が一枚打つて在つた。敬神家の翁の仕業であらう傍に大きい小さい色々の御守護札が貼り付けてあつた。

或日の事その門の敷居を跨ぐと翁が南天の根の草を拐つてゐたので

『先生。けふは朔造（梅津）さんは病氣で稽古を休みますと事傳がありました』

と云つたら翁は『ウフ〳〵』と微苦笑して

『今の若い者は弱いけに詰まらん』

と云つた。その時の朔造氏は六十近かつたと思ふ。

此話を歸つてから中風にかゝつてゐた祖父瀧國に話したら、泣き中風の祖父は叶はぬ口で

『先生はイツモ御元氣じやのう。ありがたい事ぢや』

と云つてメソ〳〵泣き出した。

◇

翁はよく網打ちに行つた。それも目堰網と云つて一番網目の小さい網をセツセと自分で繕つて那珂川の砂洲を渡り歩いたものであつた。

その扮裝は古手拭で禿頭に頰冠りをした上から古い小さい竹の子笠を冠り、紺のツギハギ着の尻をからげて古足袋を穿いた跣足で、腰に魚籠を括り付けてゐた。

その頃の那珂川の水は透明清冽で博多織糸の漂白場であつたが、すつと上流まで博多灣から汐がさして、葦原と白砂の洲が到る處に帶のやうに續いてゐた。その水深約一尺以内の處にはハラジロ（沙魚の子とも云ひ別種とも云ふ）が一面に敷いた樣に居るのを翁が目堰網で引つ被せてまはる。

ハラジロは形が小さいので獲つたアト始末が面倒な爲に普通の網打人は相手にしなかつたから何時も澤山に獲れた。その獲れる事と、獲つたアトの面倒さと、喰べる時の風味のよさが翁の樂みとし得意とする處らしかつた。

霜の眞白い淺瀨に足を踏張つて網を投げて居る翁の壯者を凌ぐ腰付を筆者が橋の上から見下して、此方を向かれたら、お辭儀をしようと思つてゐると、背後を通りかゝつた見知らぬ人がよく

『あゝまだ只圓先生はお元氣さうな』

と云ひ〳〵立佇まつて眺めたり、そのまゝ通り過ぎて行つたりした。翁の存在を誇りとして仰いでゐた福岡人士の氣持がよくわかる。

翁は網打ちに行くと何時もまだ日足の高いうちに自宅に歸つて獲れた魚の料理にかゝる。

大きいのは三寸位の本物の沙魚やドンク（タボハゼの方言）の二三十位から一寸にも足らぬハラジロの無數を、一々切出小刀で腹を割いて一列に竹串に刺し、行燈型の枠を取付けた白角い七輪のトロ火で焙り乾かして、麥稈を枕大に束ねて筒切りにしたホテと云ふもの一面に刺して天日に乾かす。乾くと水飴と砂糖と醬油でカラ〳〵に煮上げて十匹ぐらゐづゝ食膳に供する。何とも云へない雅味のある小皿ものであつた。

また俎板に殘つた臟腑は白子眞子を一々串の尖端で選り分けて鹽辛に漬ける。これが又非常に贅澤な風味のあるものらしかつた。

翁自身は勿論老夫人や女中も總がゝりで此の仕末をする。筆者も翁の姪に當る荒卷トシ子孃と二人で手傳つた事があつたがナカ〳〵兎倒なのでぢきに飽きてしまつた。

いよ〳〵獲物が片付く頃は日が暮てしまつて日に燒けた翁の顏が五分蕊のラムプに赤々と光る。

そこで例の一合足らずの硝子燗瓶が傾いて翁の顏がイヨ〳〵海老色に染まる。ニコ〳〵と限りなく嬉しさうにしてゐる翁の前に筆者は頭を下げてお暇をする。

『おゝ。御苦勞じやつた。又來なさい』

◇

只圓翁は重い曲を容易に弟子に教へなかつたばかりでなく謠の中の祕傳、口傳はもとより、稽古の時に叱つて直した理由なぞは滅多に說明しなかつたらしい。後で質問しても

『インマわかる。稽古が足らん〳〵』

とか何とか追拂はれたものらしい。高足の人達が

『私も老年になりましたから一つ何々のお稽古を…』

とか何とか云つて甘たれかゝつても

『稽古に年齡はない。年齡は六十でも稽古は孩兒じや』

なぞと手嚴しく彈付けられたと云ふ話が時折耳に這入つた。又

『此處の處はどう云ふ心持ちで…』

なぞと大切な事を尋ねても

『尋ねて解るものなら敎へる。尋ねずとも解る位にならねば敎へてもわからぬ』

と面皮を剝いで追つ拂つたり

『心持なぞはない。敎へた通りに眞直に謠ひなさい。いらざる心配しなさんな』

なぞと叱つて居るのを見受けた。

◇

ところで翁の弟子で一番熱心な前記齋田惟成氏はよく翁の網打のお供をした。魚籠を擔いで川までお供して行く途中の長い〳〵田圃道の徒然なまゝに翁と雜談をしながら何氣なく質問をすると、翁は上機嫌なまゝに大事な口傳や祕傳を不用意に洩らすことがあつた。どうかした時には師匠能靜氏から指導された時の有益な苦心談などを述懷まじりで話して行く事もあつたらしい。

これは齋田氏の稽古の祕傳で、後にその心持で謠つたり舞つたりして翁から賞められた事が度々あつたので、たうとう此の齋田氏の祕傳のお稽古法が露見してしまつた。さうして、それから後齋田氏は高弟連中から色々な質問を委託されて翁の網打のお伴をしなければならなくなつたが、時に依ると翁が意地惡く口を緘して一言も洩らさない事があつた。

『昨日は不漁じやつた』

と齋田氏が翌る日、他の弟子連中に云ふ。知らない者は翁のホテの魚の串を見て…あんなに澤山獲れて居るのに…と思つたらしいが、何ぞ計らん。齋田氏の不漁は祕傳口傳の不漁であつた。

（林直規氏談）

◇

翁の謠には『三ツ地』も『ツヾケ』も無いと誰かゞ云つて居た事を記憶してゐる。むろん其當時の筆者には『三ツ地』が何やら『ツヾケ』が何やら解らなかつたが、翁の後までも生きてゐた囃方

の古賀幸吉氏や栗原伊平氏は

『實に打ちよくて、大きくて氣乘りがした』

と云つてゐた。

『拍子の當りなぞを氣にかける樣な謠は謠では無いぞ。能の本體はシテの面と裝束じや。それを着けて舞うて居るシテの位取りを勘取つて地謠が謠ふ。それを囃方が囃すのじや。それじやけに地謠は、いつも囃方に斯樣打てと押へ付けて行くだけの力が無くては勤まらぬものじや。力のある囃方は時々自分の思ふ通りに位を取直さうとするものじやが、そげな事をされるやうな地謠は舞臺の上で腹を切らねばならぬ。間違うても囃方の尻に付いてはならぬ』

と翁は度々山本氏等に云つてゐた。

◇

翁の歿後、右の言葉は直譯的に福岡の同流を風靡した傾向がある。同時に翁は間拍子のメチヤチヤな所謂、我武者羅謠を推奬してゐたかの樣に誤解して居る間拍子嫌ひの人も多かつたらしいが決してそんな事では無かつた。

もちろん幼少未熟の筆者には、そんな事はわからなかつたが、しかし翁の門下でも梅津朔造、山本毎、齋田惟成氏などは間拍子の研究がよほど出來てゐたものと信ずべき理由がある。

その中でも梅津朔造氏は囃方シテ方を通じての教頭格らしかつた。能の前になるとよく囃方諸氏が朔造氏の前に集まつて申合せを行ひ位取りや何かの叱正を受けてゐる光景を見た。朔造氏が山本氏の中音の地謠を自身に張扇であしらつて見せて『此處の掛聲をかう云ふ風に一段と引つ立てゝ』なぞと指導してゐる前で、囃方諸老が低頭平身してゐる情景なぞが記憶に殘つてゐる。とにかく朔造氏はよほど萬事心得た人であつたらしい。

◇

山本毎氏は別に間拍子の研究をしなかつたさうである、『一生懸命唄ひ居れば間拍子は自然とわかる』といふ翁の言葉を眞正面から信じて、糞馬力と糞勉强を一貫して大成したものださうである。

福岡縣廳の低い吏員をつとめながら毎朝、蠟燭を一挺持つて中庄の翁の舞臺に來て、夜の明ける迄謠ふ。それから出勤するといふ熱心振りで、間拍子なぞも出來るどころか。あんまりキチンとして囃方に附合ひ過ぎるので翁から叱られる位であつたと云ふ。

◇

又齋田惟成氏は比較的後進だつたので特に此方面の研究を急いだらしく出勤の途中でも錢湯の中でも妙な放神狀態で兩手を動かして地拍子の取り通しであつた。氏の居住地藥院附近では、これが名物だつたので、道で遊んでゐる子供等までも氏が來ると

『齋田さん〳〵』

と云つて兩手を鰭のやうに動かしながら反り身になつて氏の背後から踉いて行つて、氏が振返ると逃げて來た。現教授佐藤文次郎君なども其の眞似上手の一人であつたといふ。

そんな次第であつたから翁の門下の高足の人とは、決して翁の歿後に福岡地方で流行したやうな我武者羅謠ではなかつた。むしろ拍子の當りが確か過ぎるのを只圓翁が嫌つて、今一層向上させるべく鞭撻してゐたのを後人が、自分の力の足りなさから、自己流に解釋して、藝道を墮落させたものに相違無いのである。

以上は拍子嫌ひの我儘流諸氏、もしくば地拍子天狗の諸氏に取つては共に不愉快な記事かも知れぬが、翁の歿後、翁の訓言が如何に強く響き殘つてゐたかといふ例證として此處に掲げて置く。

◇

故男爵安川敬一郎氏は先年筆者にかく語つた。

『私が能に志したのは六十歳の時であつた。當時福岡は只圓翁のお蔭で喜多流全盛の時代であつた。喜多流に非ざれば能樂に非すと云ふ勢ひであつた。そこでそれならば自分は一つ寶生流を福岡に廣めて遣らう。喜多流ばかりが能で無いといふ事を事實に證明して遣らう……と云ふ程のことでも無かつたが、それ位の意氣組でわざと寶生流の爲に盡力した。そのやうな譯合ひで健次郎（松本氏）などと違ふて私は翁の直門といふ譯では無い。しかし鼓を擔いで翁の門下の人々の能をつとめたのは六十歳の時以來度々であつた。あの樣な立派な先生が又現はれるかどうかわかつたもので無い。私は今でも鼓と、寶生流の研究では若い者に負けない積りである。年齡こそ八十の坂を越して居るが、能に入つたのが六十歳だから能樂の弟子としてはまだ二十歳の血氣盛りの積りで居る。なまけては居られぬと思ふが、何しろ年で、鼓が肩の上でコロ〳〵と運動するのでなあハツ〳〵〳〵』

◇

只圓翁は前記の通り稽古の上で素人と玄人の區別をしなかつた。大勢の弟子を取つてゐる人でも自分一人の樂みにしてゐる人間でも老若を問はず一列一體の嚴格さでタヽキ付けた。生中な喜多流を殘すよりはタタキ潰した方が天意に叶ふと思つてゐたらしい精進ぶりであつた。

その爲に翁の歿後、翁の遺風を繼ぎ、翁の衣鉢を傳えるに足る中心人物が、今の福岡には一人も居ない。

これは筆者の俗情には相違無いが、只圓翁が今少しく理想を低くして俗情になづみ、その指導振りをモツト素人向きに、わかり易く門下の藝能と調和させて居て呉れたならば、こんな事にはならなかつたであらう……なぞと時折り思ふ事がある。筆者も翁の門下から途中で逃げ出した一人だから斯樣な事を云ふ資格はないが。

しかし又、一方から考へると只圓翁のやうな大達人は歴史上の英雄と同様、百年に一人出るか出ないかわからないのが通例である。況んや福岡のやうな僻地に於ておやである。それだからといつて文句を絶し、情理を超越した眞の能樂の精神を強ひて言句、情理の末に殘さうとするのは、後に非常な弊害を殘すことになる。それよりも『絶後の悲哀を覺悟していゝ加減な相傳者を殘さぬ』といふ翁の行き方の方が、眞の能樂の精神を後世に傳ふる所以であつたかも知れぬ。『命は天に在り。人間の工夫何の用か成さむ。斃れて後止む』と云ふのが翁の末期の一念であつた事が今にして思ひ當られるやうである。

翁百世の後翁の像を仰いで襟を正す人在りや無しや。

思ふて此に到る時、自から胸が一パイになる。

只圓翁歿後の事

これは蛇足かも知れないが、只圓翁歿後の福岡の喜多流界の狀況を序に簡單に書き添へて置く。

翁の歿後は前記梅津朔藏氏、同昌吉氏及び齋田惟成氏が立方を指導し、山本每氏が謠曲方面を宣揚してゐた。此の諸氏が相前後して歿した後は河村、林、上原、水上(泰生氏父君)、持山、藤原の諸氏が謠曲を指導し、又能の方は大野德太郎、柴藤精藏兩氏が熊本の大家故友枝三郎翁に師事し、次で現師範友枝爲城氏、敏樹氏の兩大家に參じ、觀世流の諸氏と協力して各神社の祭事能を繼續し、其他大小の能囃子等を受持つて東都家元六平太師を招いて、只圓翁の追善能記念事業を計畫するなど福岡の斯界を風靡してゐた。

而して今から二十餘年前大野德太郎氏の歿後、福岡喜多會が成立するや、博多喜多流關係の能裝束等の保管方を依頼されてゐた柴藤精藏教授之が會長となり、或は梅津正保師範の來福指導に、又は家元六平太先生を中心とする演能の開催に努力し其他數次の演能を開催して流風の煽揚に力めたものであるが、大正の大震災後に至り現師範梅津正利氏が來福するや更に一段の緊張を來し、兩者相提携して同地方の能樂に於ける研究法の是正と、流勢の擴張に努力した。

此の如く福岡の喜多流の今日在るは全く故只圓翁の遺德を基礎としたもので、翁の遺訓は今以て他流の人士の間にも傳はり、翁の清廉無慾と翁の堂々たる藝風とは今も尙流内の人口に膾炙してゐる。

然るに博多順正寺に在る只圓翁の墓は、後嗣梅津謙助氏が遠隔の地に居らるゝ故か久しく忘れられてゐた。たゞ舊門下で小謠組であつた佐藤文次郎氏が每年忌日々々に參詣するほか、藤原宏樹氏、

柴藤精藏氏が時折參詣するばかりで、正月の元旦に梅を持つて參詣に行く事にきめてゐた筆者も其後怠り勝ちになつて、勝手な時や序の時に立寄つて拜む位の不孝さに陷つてゐた。

然るに昨大正八年の七月初旬に例年の如く只圓翁の墓を訪うた佐藤文次郎氏は『梅津只圓翁墓』と刻んだ墓石が何時の間にか『梅津家累代墓』一基に合葬されてアトカタも無くなつて居るのに驚き、急に主となつて奔走して舊門下古賀得四郎氏、同柴藤精藏氏、同筆者等に謀つた結果銅像建設の議が起つた。しかし前述の通り舊門下と云つても指を屈する程度にしか殘存してゐないので、大きな計畫は無論出來ない。その爲に前記諸氏の間で色々評議を重ねてゐる處へ古賀得四郎氏の友人、春吉の醫師松田盛氏の紹介で糸島出身の彫塑家津上昌平氏が此の評議に參加した。

津上氏は帝展に數回特選され、數多の名士の銅像を作つた人であるが、席上梅津只圓翁の人格を聞き、次いで其の寫眞數葉（前掲のもの原版）を見るに及んで非常に感激し、咄々たる口調で

『實に立派な人ですなあ。私はこんなお爺さんの顏を見るのは初めてです。失禮ですが私は私費を投じても此のお爺さんの像を製作し度いです。是非一つ思ふ存分に作らせて下さい』

と云ふので間もなく、昭和九年春の大寒中、古賀氏住宅附近の空屋に泊り込み寢食を忘れて製作に熱中し出した。

さうして筆者等の豫算計畫の約二倍大に當る等身大の座像をグン〳〵捏ね上げ初め、十數日後には、筆者等が見ても故人に生寫しと思はれる程の手法鮮かな、生けるが如き原型を作り上げた。それから毎晩半徹夜の努力を拂つて自ら石膏の型を取り、自身に荷造りして即刻東京に持歸る途中、岡山で土臺石まで自身に選擇し、東都で自身監督の下に鑄造させるといふ感激振りを示した。

翁の塑像製作中津上氏は古賀氏佐藤氏筆者等が傍で語る只圓翁の逸事を聞きながら

『愉快ですなあ。立派な人ですなあ。製作するのに氣持ちがいゝですなあ』

と打喜び、京京へ出發の際翁の石膏像を動かしながら

『私は大きな拾ひ物をしました』

と眼をしばたゝいた程の感激振りであつた。さうしてまだ發起人連中の豫算の相談も纏まらぬ中に、前掲の如き見事な銅像と土臺石が津上氏から古賀得四郎氏の許へ到着したので、筆者等は少なからず狼狽させられながらも津上氏の感激振りに心から感激した。同時に今更のやうに只圓翁の遺德の高大さを仰いだ次第であつた。

しかし此處に困つた事は津上氏の感激の爲に、ほかの場合では一番最後に後れて出來上り勝ちの銅像がまだ何事も決定しない一番先に出來上つてしまつた事である。敷地は既に翁の後嗣梅津謙助氏の好意で藥院仲庄の翁の舊宅跡に決定されたが、右につき津上氏の誠意は別の事としても、その

爲には最初の計畫の約二倍、すなはち約二千圓の寄附金を集めなければならぬ。その爲めに發起人會を後から催して運動を初めねばならぬといふ滑稽且つ、悲慘な順序に陷つてしまつたのみならず、その寄附金を集む可く種々奔走の結果、豫定の二千圓のやつと半額程度しか集まらず、製作者津上氏が自辨してゐた銅像建設の實費を辨償し得た以上には、ほとんど謝禮らしい謝禮すら出來ないといふ窮況に陷つてしまつた事であつた。

之は一に筆者等數名の不調法で赤面の外ない。製作者津上氏の素志如何に拘はらず、誠に慚愧お氣の毒に堪えない次第であるが、これも翁の歿後を飾る一つの大きな、美しい話柄……翁の遺德の爲めに吾々の微力が壓倒された事蹟として大方の憫笑に價すれば幸ひである。

事は故翁から小講を習つたに過ぎない一教授佐藤文次郎氏の謝恩の一念から起り、全くの赤の他人である彫塑家津上昌平氏の感激から來た犧牲的熱意によつて完成された事業である。其他關係者諸氏の目に見えない犧牲を加算したならば、翁の遺德の世道人心に入る事の如何に深く且つ大さいかは到底想像も及ばない位であらう。

もし此の不況險惡の時勢に於て無用不廉の事を起し一時の名聞を求むるものとして一笑に附する人士が在つたならば、それは餘りにも心無き人々として吾々は怨まざるを得ない。

世道日々に暗く、功利の爭塵刻々に深き今日、その反動として地方鄉土の名士有志の淸廉高潔なる人士が陸續として苔下に喚起され、天日下に表彰されつゝ有るは誠に吾國人個有の美德、純情の泥土化してゐない事を證するものとして意を强うするに足るものがある。這般の事業の國民精神に影響する事の如何に深遠なるものがあるかを疑ひ得ない次第である。

況んや、師恩の高大さを傳ふるのは吾々門下の責務である。吾々が親しく翁より相傳した斯道の純志であり眞面目である。その力及ばず。その能到らず。玆に翁の靈前に昂頭して罪を謝し大方の高助を得て翁の像を作り、蕪文を列ねて翁の傳を物し、翁の聖德を濟す。たゞ此の高齡、高德の士不世出の國粹藝術家梅津只圓翁の眞骨頭を世に傳へ度い微衷に他ならない事を御諒恕賜はらば幸甚である。

尙、此の『梅津只圓翁傳』を物するに當つて各方面から有力な材料話柄、指導等を賜はつた諸氏は一々列擧に暇が無い位である。更めて紙上を以て謝意を表する。

梅津只圓翁銅像除幕式（福岡日々新聞拔萃）

福岡黑田藩竿多流の先覺者梅津只圓翁の銅像除幕式は十四日昭和九年午前十一時より福岡市中庄只圓翁舊宅庭前に於て、翁の直孫牟田口利彦氏を始め武谷軍醫官、梅津正利師範、舊門弟宇佐元緒

古賀德四郎氏以下多數參列の下に盛大に擧行せられた。

修祓、降神行事に次で一同起立裡に直孫牟田口利彦氏の除幕あり、齋主後藤聲固神社宮司の祝詞奏上發起者代表、古賀德四郎氏、緣故者牟田口利彦氏、常任理事佐藤文次郎氏、來賓總代武谷軍醫監の玉串奏奠ありて古賀發起人總代の挨拶、佐藤理事の工事報告、武谷軍醫官の祝辭ありて正午閉式、引續いて祝宴に移り翁の逸話懷舊談に歡を盡し一時過ぎ散會した。因に同銅像は昨秋十月舊門弟一同發起となり一月着工、胸像は福岡縣糸島郡出身彫塑家津上昌平氏の獻身的努力により作製されたものである。

只圓翁銅像工事報告

佐藤文次郎

工事報告を申上ます。

昨大正八年の十月先生の銅像建設を思ひ立ちまして、初めは先生の菩提所である博多祇園町順正寺に建設する積りでありましたが、都合に依り先生の有緣の地である此處に建設することになりました。處が、彫刻家の方が非常に進んで、銅像はすでに出來る。當局の許可を受けねばならず。寄附金は仰がねばならんと云ふ不調法をふむ始末でありました。處が各方面諸賢方の多大なる御助力に依りまして、此處に完成を見るに至りました事を厚く御禮申上ます。御通告申上ました樣に、詳細は後日決算報告を御手元へ傳記と共に、差上る事になつて居りますので、此處では荒方工事の報告を致します。一、銅像一千一百圓、玉垣外庭石代九十二圓、庭造り四拾八圓九拾錢、維持費積立金一百圓、除幕式費用約百五拾圓外に印刷費、通信費、及諸雜費でありますが、此工事の始終に置きまして、先生御在世中の御素行に鑑み、飲食費等の冗費としては半錢も支出致して居りません事をひそかに喜んで居ります。甚だ簡單ではありますが、此を以て工事報告と致します。

（梅津只圓翁傳大尾）

昭和十年三月五日印刷
昭和十年三月十日發行

梅津只圓翁傳

【非賣品】

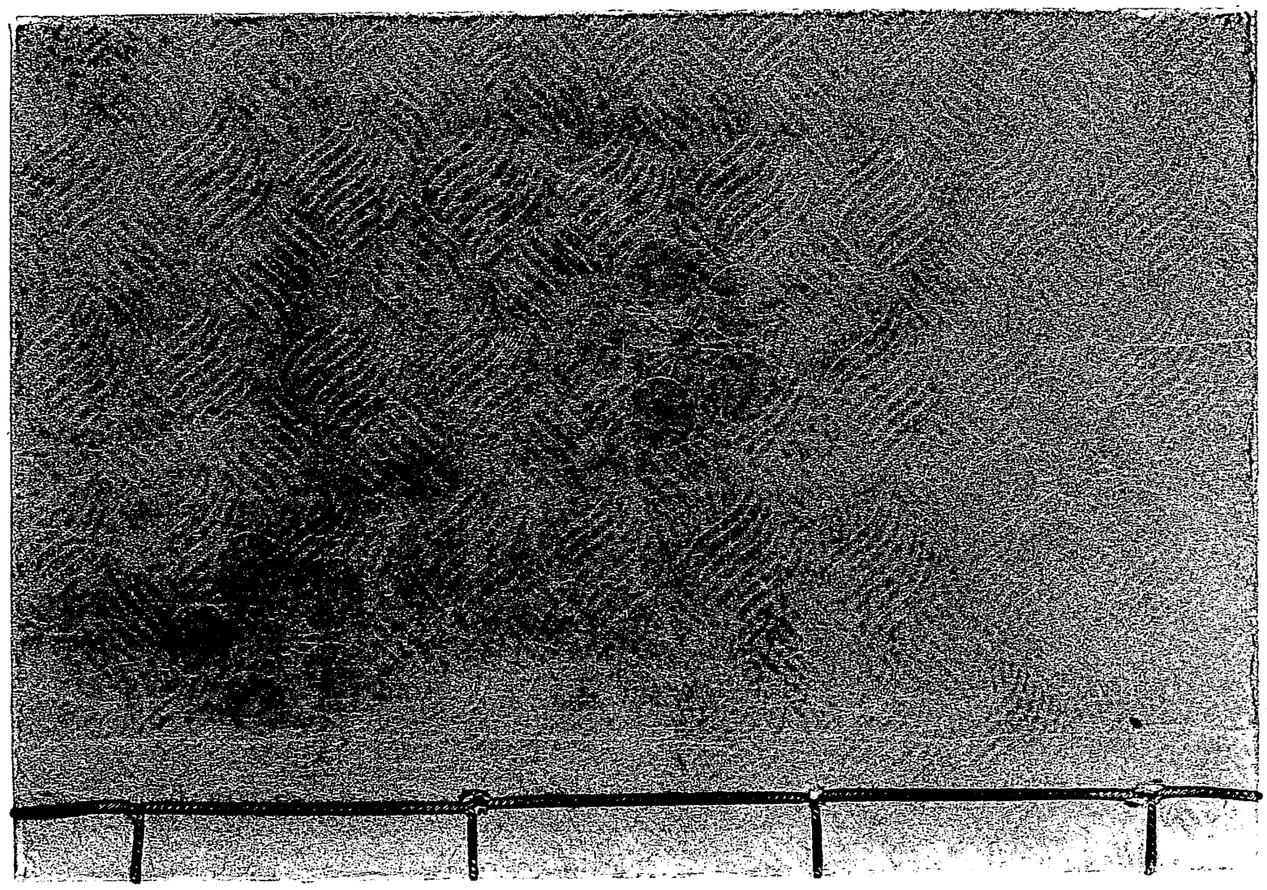
編者　福岡縣粕屋郡香椎村唐之原　杉山萠圓

發行者　東京市日本橋區吳服橋二ノ五　神田龍一

印刷者　東京市麴町區土手三番町二十九番地　谷口熊之助

印刷所　東京市麴町區土手三番町二十九番地　合資會社谷口印刷所

發行所　東京市日本橋區吳服橋二ノ五　春秋社　振替(東京)二四八六一

不許復製

製本所　芝本製本所